

杷木神籠石

朝倉郡杷木町所在杷木神籠石の調査

杷木町文化財調査報告書

第 1 集

1 9 7 0

杷木町教育委員会

杷 木 神 籠 石

朝倉郡杷木町所在杷木神籠石の調査

序

杷木町は、筑前・筑後・豊後の国境にあり、古代・中世・近世を通じて軍事上・交通上の要衝として知られてきたところである。

南北朝時代から戦国時代にかけて、針目・長尾・鵜ノ木などの諸城が国境近くにならびたち、郷土のつわものどもがかけめぐった古戦場である。この国境線近くに今回はからずも、七世紀頃築城された山城と推定される神籠石が発見されて、注目をあつめることになった。昭和44年5月から6月にかけて、この杷木神籠石の調査が実施されて、その報告書が出版されることになったことは、関係者として喜びにたえないところである。

杷木神籠石は筑後川右岸の丘陵の上に築造され、広漠たる筑後平野の最東端に位置しているところに特徴がある。更に時代を近くにして斉明天皇の朝倉の宮が造営されていることなど、当時におけるこの地方の重要性が再認識されることになり、この報告書が古代史研究の手がかりともなれば、まことにさいわいである。

この調査にあたって直接現地で担任頂きこの報告書出版まで御尽力願った、県教育庁文化課の宮小路賀宏、栗原和彦、前川威洋の諸先生方に心から感謝申しあげ、さらに御指導いただいた鏡山 猛、岡崎 敬、森 貞次郎、永井昌文、唐木田 芳文、田頭 喬、渡辺正気の諸先生方に深甚の謝意を表する。

昭和 45 年 3 月 31 日

杷 木 町 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、昭和44年に杷木町教育委員会が、国・県の補助金の交付を受け、福岡県教育委員会の協力によって発掘調査した杷木神籠石の調査報告書である。
2. 本書の執筆は次のとおりである。
 1. 宮小路 賀 宏
 2. 栗 原 和 彦
 3.
 - (1) 調査区の概要
 - 第1 水門・第2・4・10トレンチ..... 前 川 威 洋
 - 第1・6・8・11トレンチ・出土遺物..... 栗 原 和 彦
 - 第3・5・7・9トレンチ..... 宮小路 賀 宏
 - (2) 外郭線の概要..... 前 川 威 洋
 4. 唐木田 芳 文
 5. 宮小路 賀 宏
3. 掲載の写真は、宮小路・栗原・前川・金子が撮影したものである。

なお、図版1—1及び第22図は、九州地方建設局企画課の提供である。

また、実測図の作成は、挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の編集は、宮小路・栗原・前川の3名が当たったが、主として宮小路が担当した。

本文目次

	頁
1. はじめに	2
2. 位置と環境	6
3. 外郭の構造	
(1) 調査区の概要	11
(2) 外郭線の概要	25
4. 外郭線使用列石の石質	27
5. おわりに	30

図 版 目 次

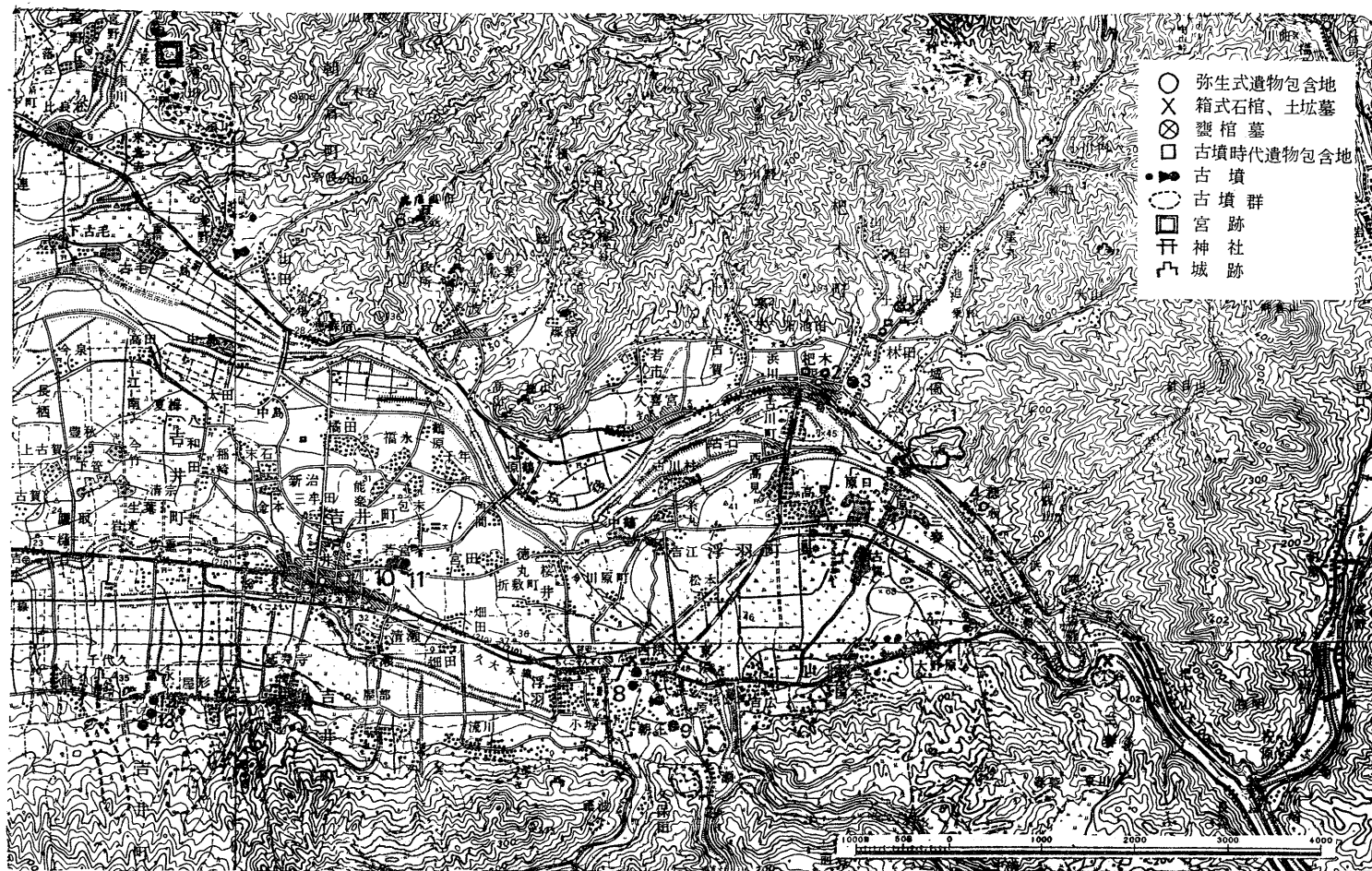
本文対照頁

図版 1	(1) 杷木神籠石航空写真	25
	(2) 杷木神籠石遠景	25
2	(1) 杷木神籠石遠景	25
	(2) 第Ⅰ水門とその谷	11
3	(1) 第Ⅱ水門	20
	(2) 第Ⅱ水門	20
4	(1)・(2) 第Ⅱ水門	20
5	(1) 第1トレンチ	11
	(2) 第2トレンチ列石	13
6	(1) 第6トレンチ列石	19
	(2) 第11トレンチ列石	23
7	(1)・(2) 第11トレンチ北側斜面外郭線	25
8	(1)・(2) 外郭使用石材（山平氏造成地出土）	30

挿 図 目 次

1. 杷木神籠石付近遺跡分布図 (国土地理院地形図 1 : 50,000. 栗原作成)	1
2. 第 8 トレンチ (第Ⅱ水門) 発掘風景	5
3. 石器実測図 (栗原製図)	7
4. 弥生式土器実測図 (栗原製図)	8
5. 土器実測図 (栗原製図)	8
6. 手づくね土器実測図 (栗原製図)	9
7. 立聞社遺跡出土土器実測図 (栗原製図)	10
8. 第 1 トレンチ付近地形実測図 (宮小路製図)	12
9. 外郭線断面実測図 (前川製図)	とじこみ
10. 第 2 トレンチ付近地形実測図 (宮小路製図)	14
11. 第 3 トレンチ付近地形実測図 (宮小路製図)	15
12. 外郭線断面実測図 (前川製図)	16
13. 第 4 トレンチ土塁断面実測図 (前川製図)	17
14. 第 4 トレンチ出土方形切石	18
15. 第 6 トレンチ付近地形実測図 (宮小路製図)	19
16. 第 8 トレンチ (第Ⅱ水門) 及び第 4 トレンチ付近 地形実測図 (宮小路製図)	21
17. 第 8 トレンチ (第Ⅱ水門) 付近地形実測図 (宮小路製図)	22
18. 第 9 トレンチ断面実測図 (宮小路製図)	23
19. 採集遺物実測図 (栗原製図)	23
20. 出土遺物実測図 (栗原製図)	23
21. 第11トレンチ付近地形実測図 (宮小路製図)	24
22. 杷木神籠石地形図 (九州地方建設局提供・前川製図)	26
23. 耶馬溪火山岩類分布図 (唐木田作図)	29
24. 九州における神籠石分布図 (宮小路作図)	32
25. 筑後平野と高良山神籠石を望む	33

なお、実測図の作成は、宮小路・栗原・前川が行なった。



第1図 杷木神籠石付近遺跡分布図 (1. 杷木神籠石 2. 立間社遺跡 3. 林田遺跡 4. 穂坂遺跡 5. 朝倉宮跡 6. 麻底良布神社 7. 楠名古墳 8. 重定古墳 9. 塚花塚古墳 10. 月ノ岡古墳 11. 日ノ岡古墳 12. 珍敷塚古墳 13. 鳥舟塚古墳 14. 古畑古墳)

はじめに

杷木町に神籠石が県立朝羽高等学校長江頭喬氏・同校教諭柴田泰典氏によって発見されたのは、昭和42年4月のことであつた。

発見の端緒となつたのは、土地所有者山平正則氏のドライブイン建設計画によるもので、その地点は国道と筑後川に挟まれた丘陵（独立丘に見えるのは、県道建設により切り通されているためである）である。削平工事は昭和41年中から開始されている。

神籠石発見の知らせが県教育委員会になされたのは、昭和42年11月のことであつた。そこで県教育委員会は宮小路を派遣し、遺跡を確認し、工事中止と所定の手続きが行なわれるよう町教育委員会に依頼した。

文化庁の指示のもとに県・町教育委員会は、遺跡の重要性にかんがみ、保存の方向に進むことを協議した。土地所有者山平正則氏は、経済的理由から強く削平を希望されていたが、杷木町長林一二三氏以下町の努力によって、杷木神籠石保存への見とおしがついたことに対し、深く謝意と敬意を表わす次第である。

神籠石の命名は、普通山の名をとって命名しているが、当神籠石郭内には山名がなく、また杷木町にとっても最も大きく重要な遺跡であることから「杷木神籠石」と命名した。

今回の発掘調査の目的は、今後杷木神籠石を保護するための基礎的資料を得ることにある。外郭線の探索によって杷木神籠石の規模を知ることである。

発掘調査には次の調査員が当つた。

指導調査員

九州大学教授	鏡山 猛
“ 助教授	岡崎 敬
“ “	永井昌文
“ 講師	森 貞次郎

調査員

西南大学教授	唐木田 芳文（石質調査）
県立京都高等学校	田 頭 喬
福岡県教育委員会	渡 辺 正 気
“	宮小路 賀 宏
“	栗 原 和 彦
“	前 川 威 洋

杷木町教育委員会

井 手 滝二郎

”

金 子 義 雄

なお、現地調査に当っては、大山秀太氏には終始調査進行上のお世話を、また、地元の方々には作業員としてご協力いただいた。

県立浮羽西高等学校教諭柴田泰典氏にも種々ご示教をいただいた。記して深甚の謝意を表わすものである。

発掘調査は、昭和44年5月19日から6月24日まで行なった。調査は、当神籠石の規模を確認することにあるため、必要以上の発掘面積の拡大をさけ、トレンチによる列石と土塁の確認を主体に行なった。

以下に調査日誌を抄録してみよう。

5月19日 杷木町公民館に集合し、調査全般の打合せののち、現地を一周し、外郭線を推定し、トレンチ設定個所の決定を行なう。

5月20日 まず、外観して土塁の最も遺存の良いと思われる個所に第1トレンチを設定した。つづいて第2・3トレンチを設定。前記3個所において、各々列石を確認したが、列石上面前端から土塁が始まらず、また土塁自体の版築状態も不明瞭である。土塁が流失したものであるか、列石が移動したものであるか判断できないため、第4トレンチを設定した。

5月21日 国道添いの地で、当神籠石の発見の原因となった工事現場における外郭線との連絡を知るため第7トレンチを設定。しかし列石及び土塁は発見できなかった。したがって、第7トレンチと第6トレンチの間で外郭線の確認が必要となった。

当神籠石には2個所に水門が築造されている。第Ⅰ水門跡は道路及び住宅下になっているため調査不可能である。第Ⅱ水門跡は、道路及び水田下になっているが、水門跡の規模と構造を知るため第8トレンチを設定した。

5月22日 第Ⅱ水門跡の発掘継続と、第Ⅰ水門跡と第Ⅱ水門跡の間に第9トレンチを設定。

5月23日 第Ⅱ水門跡の発掘継続。湧水のため難行。水門後端部と考えられる切石を発見。

5月24日 水門後端部を確認するためにさらに掘り下げる。昼近く雨が本降りになったため作業を中止する。

5月25日 第7トレンチにおいて遺構の発見がなかったので、第6トレンチとの間に第10トレンチを設定する。

列石1個を確認したが、列石後部は所有者が異なり、なお果樹園であるため土塁確認のトレンチは設定できなかった。

5月26日 第11トレンチを設定し発掘する。

5月27日 雨のため作業中止。公民館所蔵の遺物実測を行なう。

午後4時、文化庁田村晃一技官・県教育委員会文化課渡辺正気課長技術補佐・春日町教育委員会亀井勇先生到着。

5月28日 佐賀県所在おつぼ山・帯隈山両神籠石において、列石前面に柱穴が発見されているが、当神籠石の現在までの調査においてはまだそれを確認していない。したがって、第6トレンチ設定個所において確認すべくトレンチを拡張したが、発見することはできなかった。

また、第5トレンチの掘り残し部分の発掘を行なう。

5月29日 第5・6トレンチの清掃と写真撮影及び実測図作成を行なう。

5月30日 第11トレンチの清掃と写真撮影及び実測図作成。

5月31日 第Ⅱ水門跡（第8トレンチ）は、27日の降雨でトレンチの壁が崩れ埋まってしまったので再発掘を行なう。

6月1日 作業員の申し入れにより休日とする。

6月2日 第Ⅱ水門跡の土層図作成。並びに清掃を行なう。唐木田先生到着。

6月3日 雨のため作業中止。

6月4日 昨日の雨のため第Ⅱ水門は若干埋まる。清掃を継続し、50分ノ1大の平板測量図作成。

6月5日 発掘調査の進展に平行して、地元民の一部に史跡指定反対にともなう発掘調査反対の動きがあり、調査続行に困難をきたす事態となった。

したがって、本日の作業は外郭線測量のための藪の伐採を行なう。

6月6日 雨のため作業を中止する。宮小路・栗原・前川は、県教育委員会に帰庁し、調査反対の事態を報告するとともに、その前後策について課内会議を行なう。

午後8時30分から、杷木町役場及び県教育委員会文化課並びに調査区の地主の各関係者により討議を行なう。ともかく調査続行の依頼を行なう。

6月7日 第Ⅱ水門跡後背部の発掘作業と第3トレンチの清掃・写真撮影・地形測量図作成。

6月8日 第Ⅱ水門跡の発掘終了。土層図・写真撮影を行なう、平行して第3トレンチの埋め戻し作業。

6月9日 第7・9・10トレンチ付近の地形測量。第5・6・7トレンチの埋め戻し作業。

6月10日 第Ⅱ水門跡付近の地形測量開始。第7・9・10トレンチの埋め戻し作業。鏡山猛先生の現地指導あり。

6月11日 第Ⅱ水門跡調査区（第8トレンチ）の埋め戻し作業開始。昼近く雨が本降りとなり作業を中止する。

6月12日 雨のため作業中止。調査員は浮羽工業高等学校所蔵の杷木町内出土遺物の調査を

行なう。

なお、調査禁止地区の解除が行なわれた。

6月13日 第Ⅱ水門跡調査区の埋め戻し作業継続。第2トレンチの土層図及び第4トレンチ付近地形測量図作成。

6月14日 第Ⅱ水門跡埋め戻し継続。第2トレンチの清掃・写真撮影。第1トレンチの写真撮影・土層図作成。

6月15日 第8トレンチ埋め戻し作業完了。第Ⅱ水門跡及び第1・2トレンチ付近地形図作成。

6月16日 第2トレンチ付近地形測量図作成。第2・4トレンチ埋め戻し作業終了。

6月17日 雨のため作業中止。杷木町公民館所蔵の遺物調査を行なう。

6月18日 第1トレンチ付近地形測量図作成。

岡崎敬・森貞次郎・永井昌文先生の指導、及び県教育委員会文化課岩下光弘課長補佐の案内で文化庁内山正文化財保護部長の視察あり。

6月19日 第Ⅱ水門跡付近地形測量継続。

6月20日 雨のため作業中止。杷木町公民館所蔵遺物調査。

6月21日 第Ⅱ水門跡付近地形測量継続。

6月22日 第Ⅱ水門跡付近地形測量継続。

6月23日 第Ⅱ水門跡付近地形測量図完成。

6月24日 当神籠石から東方約2.5kmに所在する針目山登山。遠景写真撮影と列石に使用された石材と同質の岩石露頭を確認。本日をもって調査を終了する。



第2図 第8トレンチ（第Ⅱ水門）発掘風景

2. 位置と環境

杷木神籠石は、福岡県朝倉郡杷木町大字林田・穂坂にある。杷木町は、九州山脈から流れた筑後川が筑後平野にかかる、その北岸にある。

甘木市から杷木町にかけて低い山並みが、筑後川にせまり、東は大分県日田市との間が峠となっている。筑後川をはさんで、浮羽郡浮羽町に接し、浮羽郡の背には、耳納水縄山脈がある。筑後平野が扇状に広がるそのかなめの位置に杷木町はある。

神籠石は、杷木町大字林田と大字穂坂との間、針目山（標高497m）から、筑後川に向けてはり出している尾根の先端にある。今日、県道日田線が筑後川にそって作られ、林田と穂坂の間で神籠石を分断している。

この神籠石のある朝倉郡杷木町は、筑後川を境として筑前、筑後に分かれ、筑前国上座郡⁽¹⁾の杷木であった。近くには、斉明紀7年に見える伝「朝倉橘廣庭宮跡」⁽²⁾（朝倉郡朝倉町須川長安寺付近）や、神名式に見える麻氏良布神社⁽³⁾などが有名である。

また、杷木町は、兵部式に広瀬⁽⁴⁾（朝倉郡朝倉町宮野付近）、隈崎（朝倉郡朝倉町須川付近）とならんで、杷木とあり、大宰府から、豊後へ抜ける駅の一つであった。筑後川ぞいに豊後へ抜ける道は、広嗣の乱の際にも出てくる。綱手が、筑後・肥前の兵士をひきいて通っている⁽⁵⁾。

また、杷木町周辺には、数多くの山城がある。神籠石の郭内にも、長尾城跡⁽⁶⁾、鵜ノ木城跡⁽⁷⁾がある。この城は、豊後の大友宗麟と古処山（甘木市）の秋月種実との戦いのさい、秋月氏の出城として役立っている。このように、小さな山城がいくつもあることは、一つには、筑後川ぞいのこの道が重要であったためと思われる。

また、この杷木周辺には弥生時代以降の遺跡も多い、平野部から山に移行する等高線 100m 前後のあたりに弥生式土器、石器などの出土が見られ、浮羽町の山手には、いくつもの群集墳が知られている。中でも、装飾古墳として、重定・塚花塚・日ノ岡・珍敷塚・鳥舟・古畑古墳などは有名である。

註 1 延喜式卷廿二 民部上 西海道

2 日本書紀卷廿六 齊明七年辛酉五月乙未朔癸卯。天皇遷²居于朝倉橘廣庭宮。¹

3 延喜式卷十 神祇十 上座郡一座 麻氏良布神社

4 延喜式卷廿 八兵部省 西海道 筑前国駅馬〔中略〕額田。石瀬。長丘。杷伎。廣瀬。隈崎。伏見。綱別各五疋。〔後略〕

5 続日本紀 天平十二年冬十月壬戌 逆賊廣嗣謀云。從三道往。即廣嗣自率大²₁

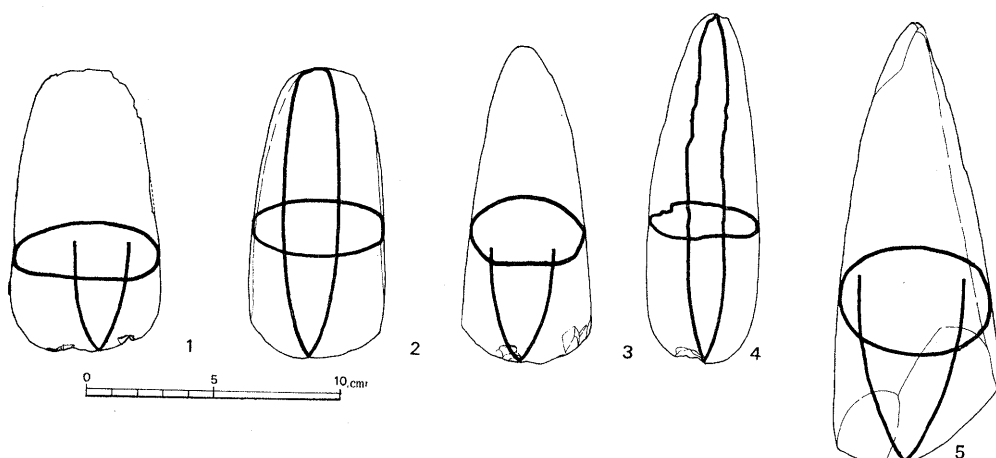
隅。薩摩。筑前。豊後等国軍合五千人許。¹ 從鞍手道往。² 綱手率筑後。¹ 肥前等国軍合五千人許人。一略一²

なお、この項は、小田富士雄「上代に於ける大宰府と豊前」九州史学第10号を参照した。

杷木町出土遺物

(1) 石 器 (第3図)

出土状況・伴出遺物などは、不明である。これらの磨製石斧の石材は、1・2・4が蛇紋岩、5が玄武岩製である。3は不明。なお、1・2・3・4は、昭和41年9月発見とある。

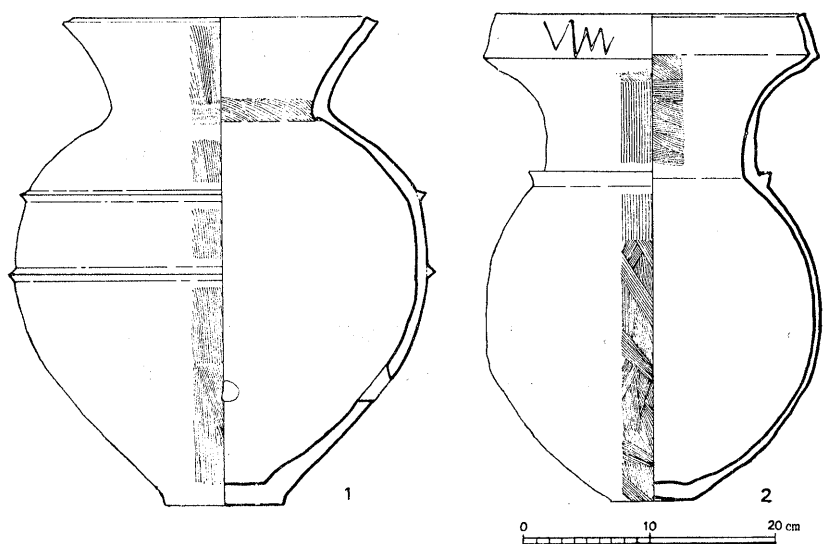


第3図 石 器 実 測 図 (1—上池田, 2・3・4—林田, 5—東林田出土)

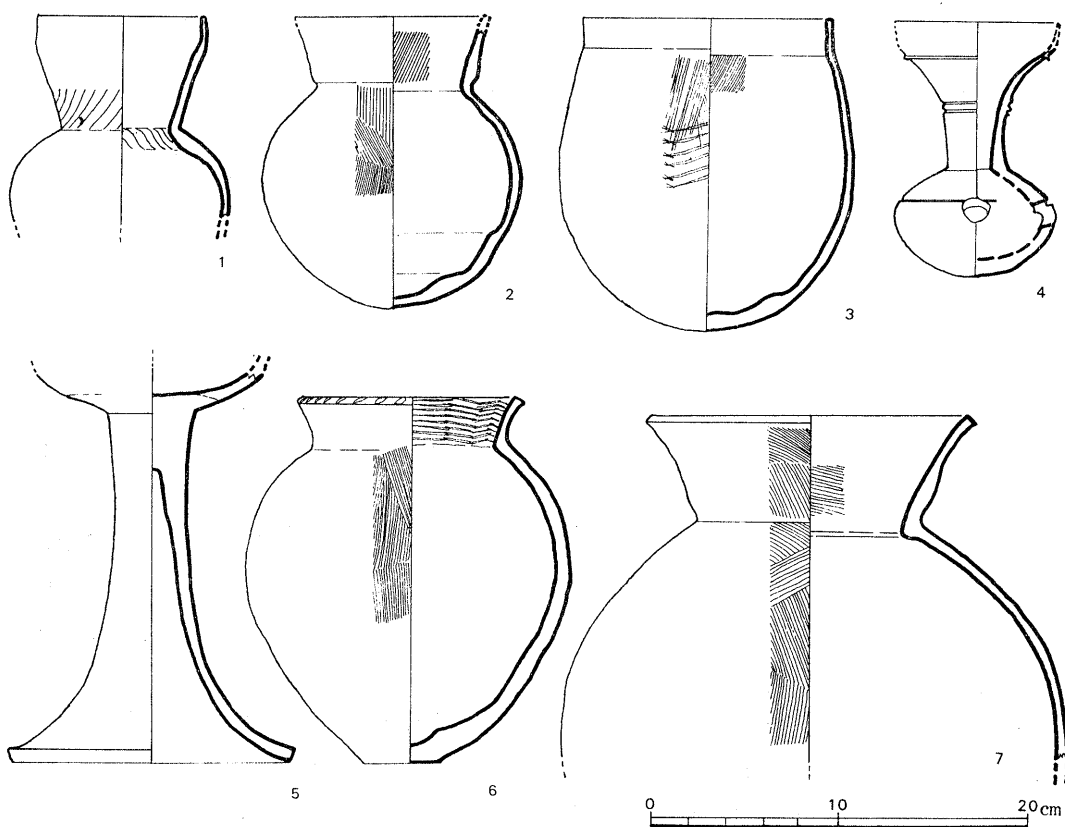
(2) 土 器

その1 (第4図) 両者とも、出土状況は、不明である。1は弥生後期ころの壺形土器である。胴部に2条の突帯をめぐらしている。全体にハケ目で仕上げをしている。胴部下半に1ヶ所、焼成後穴がけられている。埋葬に使用されたものかと考えられる。2も壺形土器で、弥生後期後半ごろのものと考えられる。く字形口縁の外側の1部に、ヘラで直波状のキザミを入れている。頸部には一条の突帯をめぐらして、胴部・頸部ともハケ目で仕上げられている。頸部内側は、横方向を主体としたハケ目が見られる。褐色から灰褐色をした焼きの良い土器である。

その2 (第5図) 1～5・7は、昭和41年9月と日付けがあり、おそらく同一場所から出土したものと思われるが、出土状況などは不明である。1は底部を破損しているが、須恵器の壺である。頸部の内・外にひねった様な痕がある。2は口縁部はないが土師器の埴である。表面と口縁内側にハケ目があり、内側底部付近は粘土ひものつなぎ目を指でなでつけている。淡



第4図 弥生式土器実測図(林田出土)



第5図 土器実測図

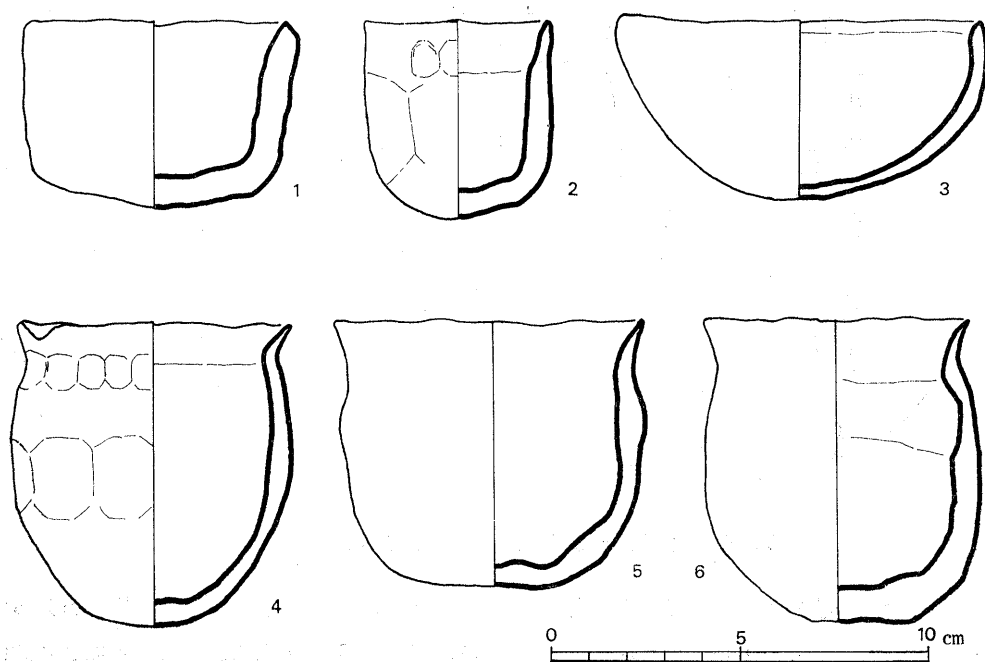
いレンガ色で焼・胎土ともに良い。3は、弥生末から土師器にかけての小型の甕である。器の表面をたたいて、はけ目で仕上げている、4は、須恵器の賸である。口縁部がない。5は、弥生の高杯である。表面は丹塗彩されている。杯と脚のつけねの部分でついでいる。6は、全体に明るい茶褐色の甕で荒いハケ目で仕上げられている。7は、胎土・焼き上りとも2に近い感じの土師器の甕でハケ目も2に近い。胴部下半は欠損している。なお口頸部と胴部とは別々につくりはりあわせたものらしく、内側で1段、段がついている。

その3（第6図） 手づくね土器である。昭和41年9月と記されているが出土状況は不明である。どの土器にも指の痕が、はっきりと残り、6などは、内側を指でなぜまわした痕がある。赤褐色から、暗褐色で焼き上りはよい。弥生終末期から古墳時代にかけての祭祀関係の遺物であろうか。

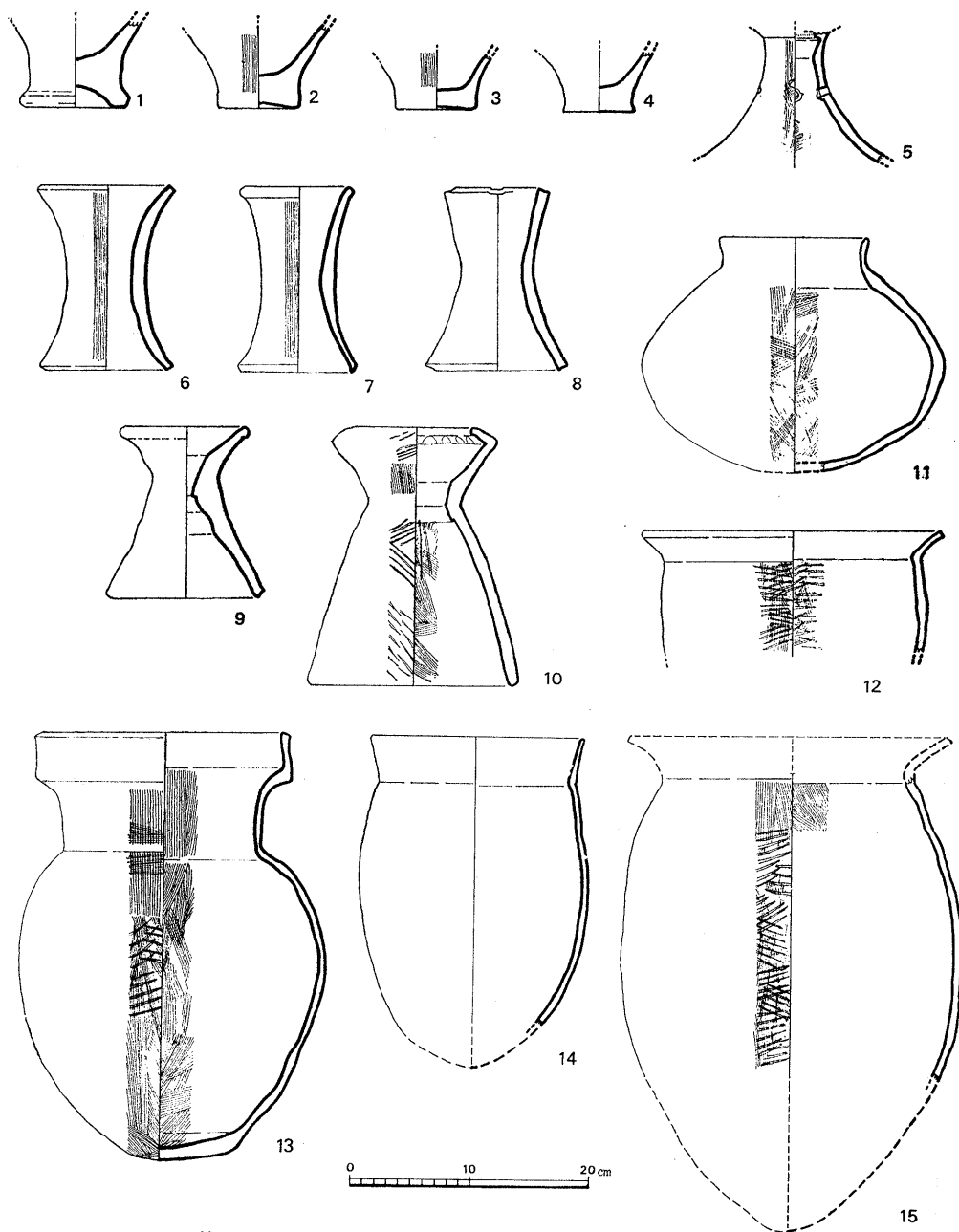
その4（第7図） 杷木バイパス脇の畑地で、昭和42年宅地造成によって出土した土器である。浮羽工業高校の学生の記録によると、地表より1m下に幅40cm程の腐食土があり、その上は、赤土である、腐食土下も大つぶの砂混りの赤土である。土器は、腐食土中からも出土しているが、出土土器の大半は腐食土下の赤土から出土していたようである。

今日、この場所は家が建ってしまっているが、東側のブドウ畑にもその続きがあるようである。現在、立聞社遺跡とよばれている。

ここでは、土層による遺物の分離は出来ないが、土器を簡単に紹介しておく。



第6図 手づくね土器実測図



第7図 立間社遺跡出土土器実測図

1～4は、弥生式土器で甕の底部である。1は、砂が多い土器で黄褐色。3は雲母が入っていて褐色をしている。どの土器も焼きは良い。5は、高杯の脚部である。表裏ともにごく細かいハケ目がある。弥生後期と思われる。6～10は、弥生中期から後期の器台である。しかし、

9・10あたりは古墳時代のものかもしれない。6・7は、黄褐色の土器で表面をハケで仕上げている。8は、口縁部に1ヶ所指の痕らしいものがある。黄褐色の土器で焼も良い。9は、6～8にくらべて脚の開き方が大きくなる。10は黄褐色で雲母の多い土器である。表面は、叩目とハケ目があるが叩打してからハケで仕上げたものであろう。裏面は、口縁裏をおさえていて、胴部から下は、ハケ目が見られる。11は、土師器の壺である、胴部中央にヘラ削りと思われる痕があるが仕上は、ハケである。口縁部は横方向になでつけられている。12は、甕形土器の破片である。この土器は、表裏ともに叩打され、ハケで仕上げられている。灰褐色の焼きの良い土器である。13は、複合口縁の壺である。全体にハケ目の仕上が見られるが、胴部にタタキ目がある。口頸部、胴部、底部の三つを、別々に作りあわせたもののようであり、接合されたと思われる部分が、やや厚くなっている。14は土師器の甕形土器で、胴部表面にヘラ削りの痕がみられる。口縁部は横方向になでつけられている。15の甕形土器は、口縁部、底部はない。ただ12の甕形土器から、図のように外反することが予想される。タタキ目とハケの仕上げが見られる。これらの土器のうち、10・12・13・15は、土器の製作手法において、叩打具をつかって、ハケで仕上をしている点、同時期のものと考えて差しつかえなく、セットになるものであろう。

3 外郭の構造

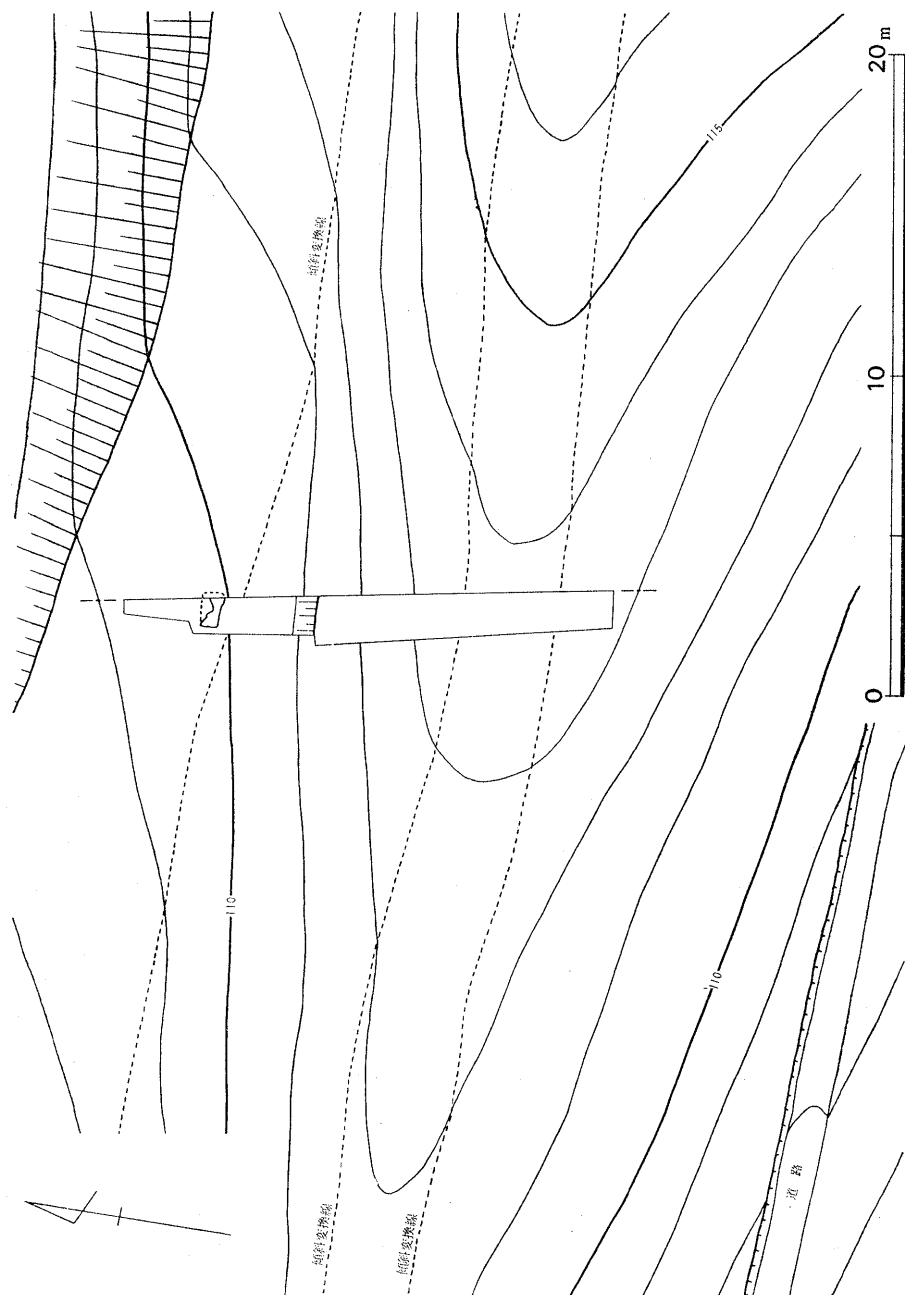
1. 調査区の概要

第Ⅰ水門 二日市から日田にぬける県道が杷木神籠石の列石内にはいる地点のすぐ北側で、南西に口をひらく谷の入口にあたる。現在は道路や水田の下になり、その一部をみせているだけで、谷の水が道路下の暗渠を流れ、水門の石垣を流れ落ちている。石垣は3段積みで高さ1.4mである。

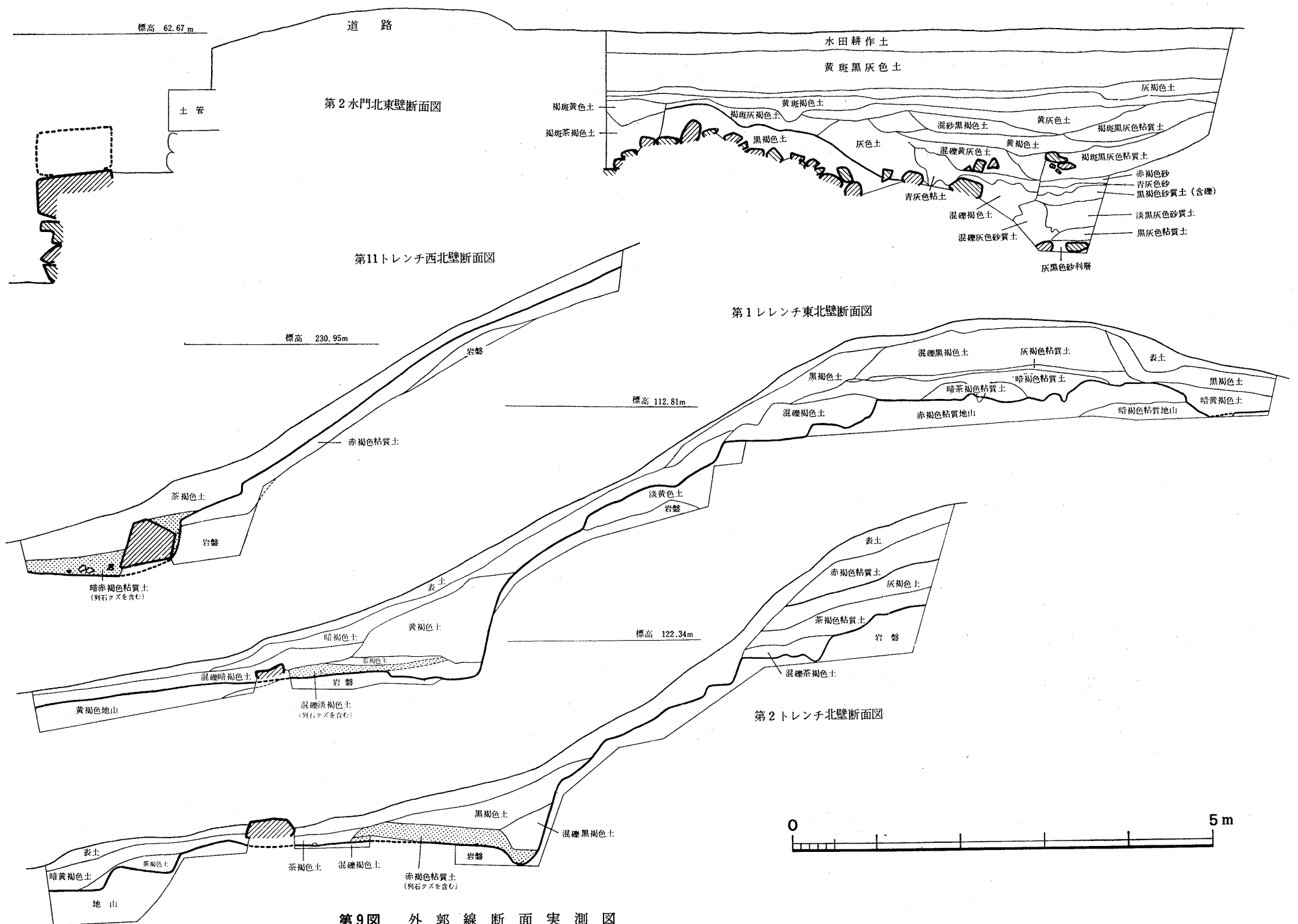
第Ⅰトレンチ（第8・9図、図版5—1） 第Ⅰトレンチは、第Ⅱ水門から東へのびる列石線が尾根ぞいに登って、傾斜が緩くなるあたり標高110m程の松林のなかに設けられた。発掘前の踏査で、この附近は尾根を利用して土塁が構築されたようで尾根の頂部は幅3mほどの平坦な場所があり、尾根の北側には5～7mの傾斜面となっている。傾斜面の先は、また、幅5～6mの平坦な部分となり、その先は急斜面となって、眼下に東林田の果樹園をみおろしている。尾根線の南側は、第Ⅱ水門裏側の谷間まで松などの林がつづいている。トレンチは尾根の部分から、北にかけてほぼ南北に、幅1.5m長さ15mにわたって松をよけながら設定した。

この結果、頂上部では、表土の下から地山まで、約1m程の積土が認められた。また、傾斜面から、下の平坦部にかかる場所に列石の石が検出された。この石から1mほど内側で地山が

ほぼ垂直に切りとられて、石との間に積土をしていることが認められた。この列石は、風化がひどいが原位置にあるものと見られる。このことから列石をならべるにあたり、下の部分を切



第8図 第1トレンチ付近地形実測図



りとして傾斜面を整え、頂上に土を盛ってより高い土塁としたと推定出来る。自然の地形をうまく利用して土塁としている。

第2トレンチ（第10・9図、図版5—2） 第1トレンチの尾根をのぼった所、標高120mの附近に一つの平地があり、北側は急傾斜になっている。その傾斜にかかる角から約7mくだったところに幅狭い平坦面があり、列石の一部が発見された。それで列石から上部の平地までの傾斜面を土塁と想定し、その断面を調べるために長さ11.5m、幅1mのトレンチを設けた。その結果、この傾斜は片岩の岩盤であり、土盛りの形跡は認められず、平地に近い傾斜面で一部版築かと思われる部分があるが、これとても確実に版築と断定することはできなかった。傾斜面下部から列石にかけて、地山は平坦に削られ、斜面も一部垂直に切りとった状態になっている。この地山の上に、列石を加工したときの石屑がしきつめられたようにあり、この地山面が列石および土塁築造時の作業面であったことがわかる。ただし列石自体は風化がはげしく、地山からも浮いた状態であり、また石屑の面からも少しずれていて、原位置ではなく少し移動しているものと考えられる。この列石から上の平地までの高さは約4mである。この第2トレンチ附近は比較的列石が多く残存し、地表から列石の配列状態を観察することも可能である。しかしすべての列石が連続して残っているわけではなく、ボーリングの結果からも、ところどころ列石が抜け落ちた部分も認められる。さらに柱穴探究のため列石の前面を掘ってみたが、柱穴は発見できなかった。以上のようにこの地区では土塁は確認されなかったが、列石の前方は急傾斜をなしているため、地形をうまく利用して山城の土塁としての効果を十分にあげている。

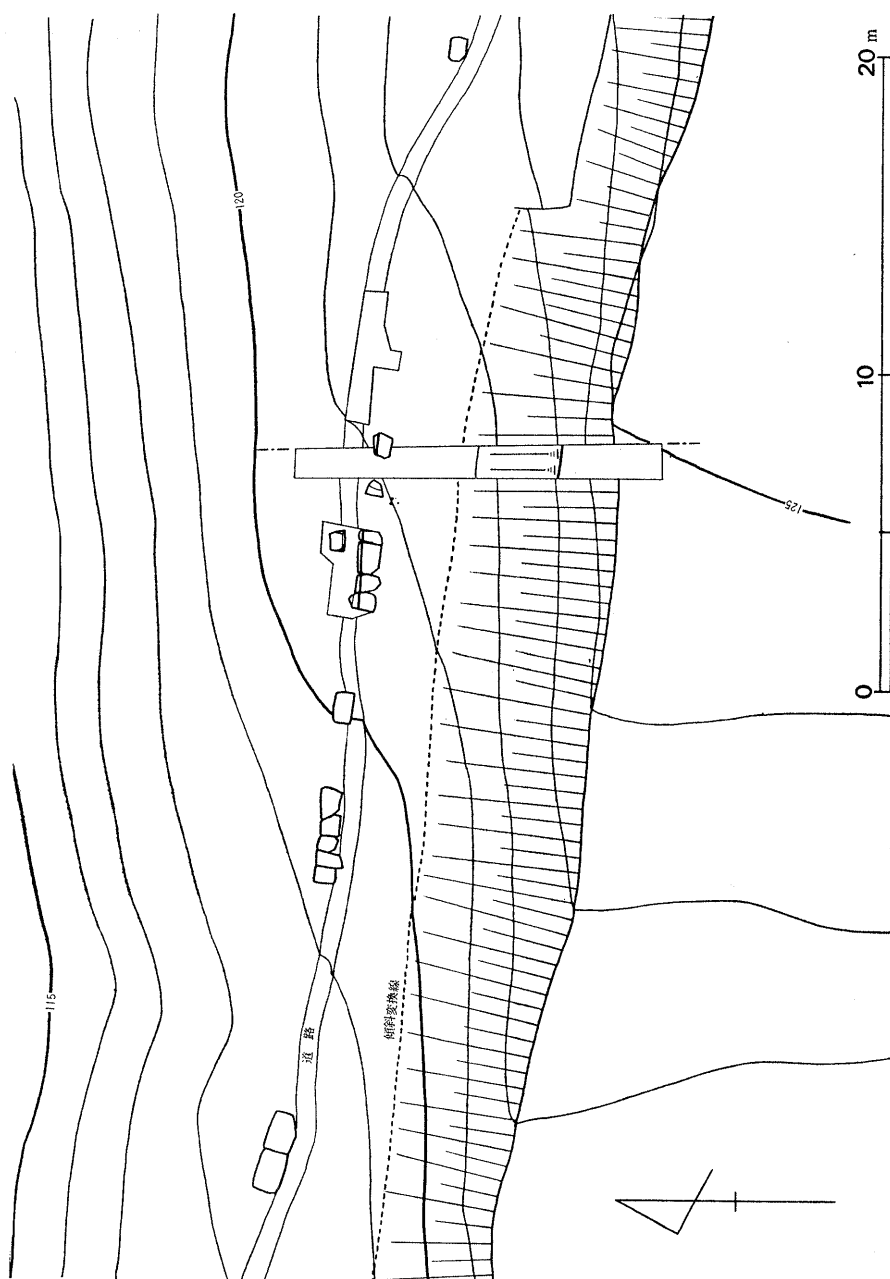
第3トレンチ（第11・12図） 地表観察では外郭線を推定することはできなかった。第11トレンチとの間に谷があり、尾根を下ってこの谷に水門を作るかとも思われたが全体的地形から尾根を下ることはないと考え、尾根筋を若干さけてトレンチを設定し外郭線を確認した。

約20度の傾斜面で土塁の兆候は見られなかったが、表土をとると列石の頂部が発見された。土層図でわかるように第2層（褐色土）は列石から尾根の頂部に至るまで続き、版築とは考えられない。第2層下は、上半部においては直ちに地山（赤色粘土層、一部に岩盤）となる。列石の背後約2mのところでは地山が約60cm掘り下げられて平坦部が作られ、列石が設置されている。ここには赤褐色粘質土、黄褐色粘質土が版築として遺存している。

第4トレンチ（第9・13・14図） 第Ⅱ水門から列石が北にのぼった標高約95mの地点で、第Ⅱ水門をみおろす位置にあり、この間列石線は等高線とほぼ直角で、急勾配になっている。この附近では土塁線の残りが最もよく、下草が刈ってあるため、いっそうよくその状態を見ることができる。そのうち約1.5mの高低差がある土塁の断面をみるために、長さ10.5m、幅2mのトレンチを設けた。その結果列石の一部と明確な土塁を確認することができた。

まず土塁上部（東側）では浅くして地山になるが、地山線は幅約2mで土塁の傾斜にそって

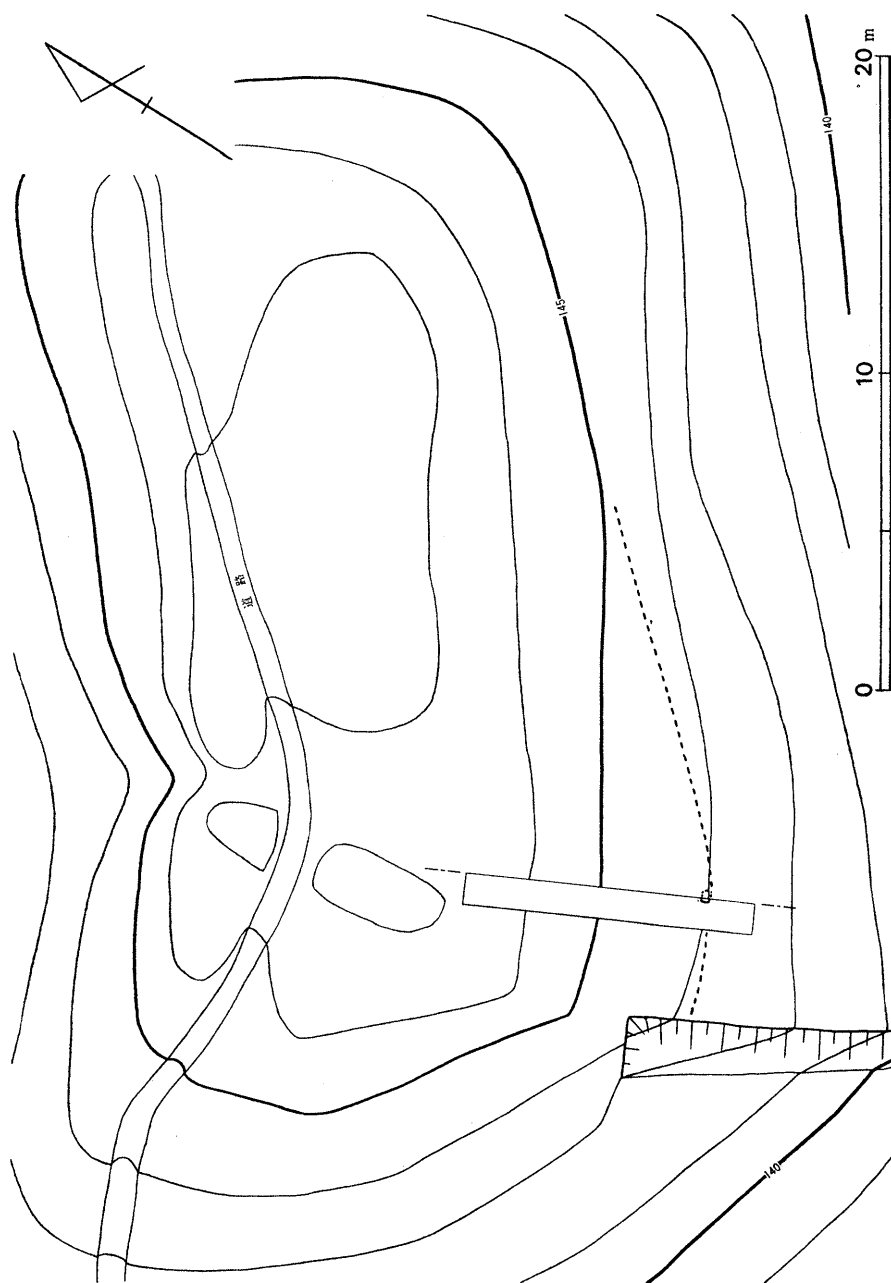
急に深くなっている。その間はほぼ水平な版築となっていて、約11層をかぞえる。この版築のちょうど中間部に、炭や焼土の層があり注目されるが、その性格については明確ではない。土



第10図 第2トレンチ付近地形実測図

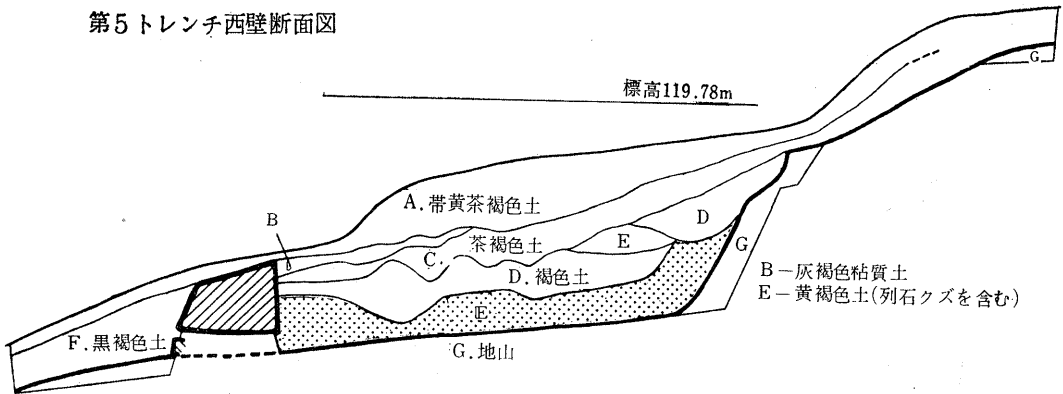
墓の前面からは列石が2個発見されたが、少し原位置から動いているようである。

そのうちの1個は最大幅62.5cm×60.7cm、厚さ約31cmのきれいに面取りされた石で非常

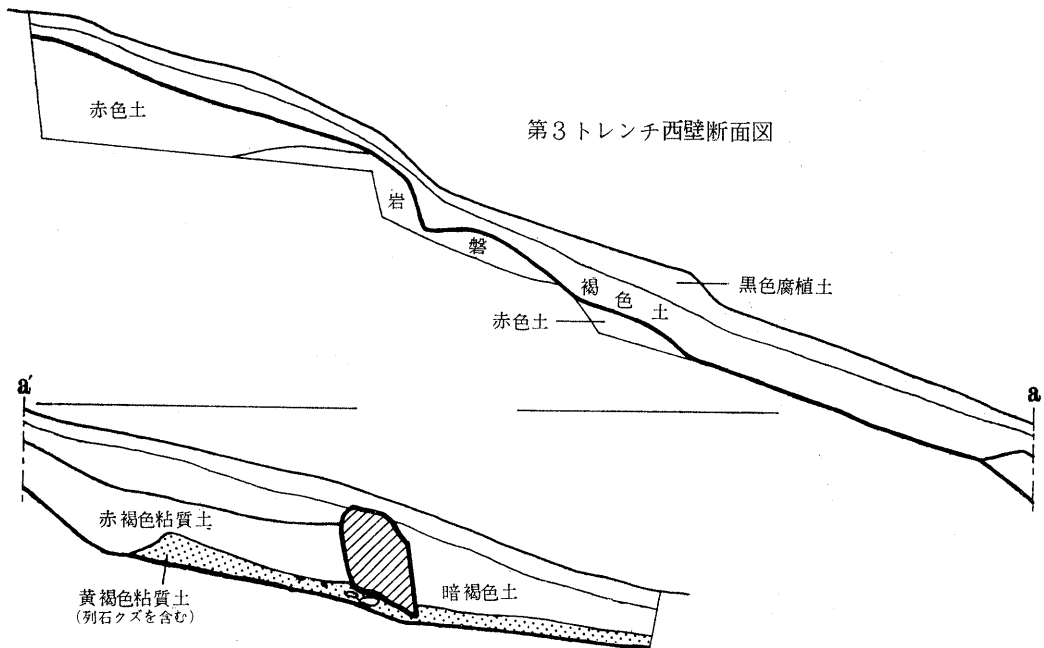
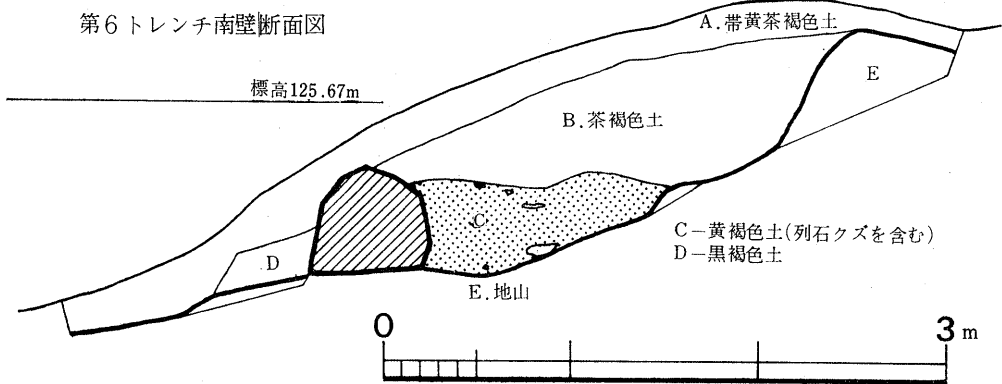


第11図 第3トレンチ付近地形実測図

第5トレンチ西壁断面図

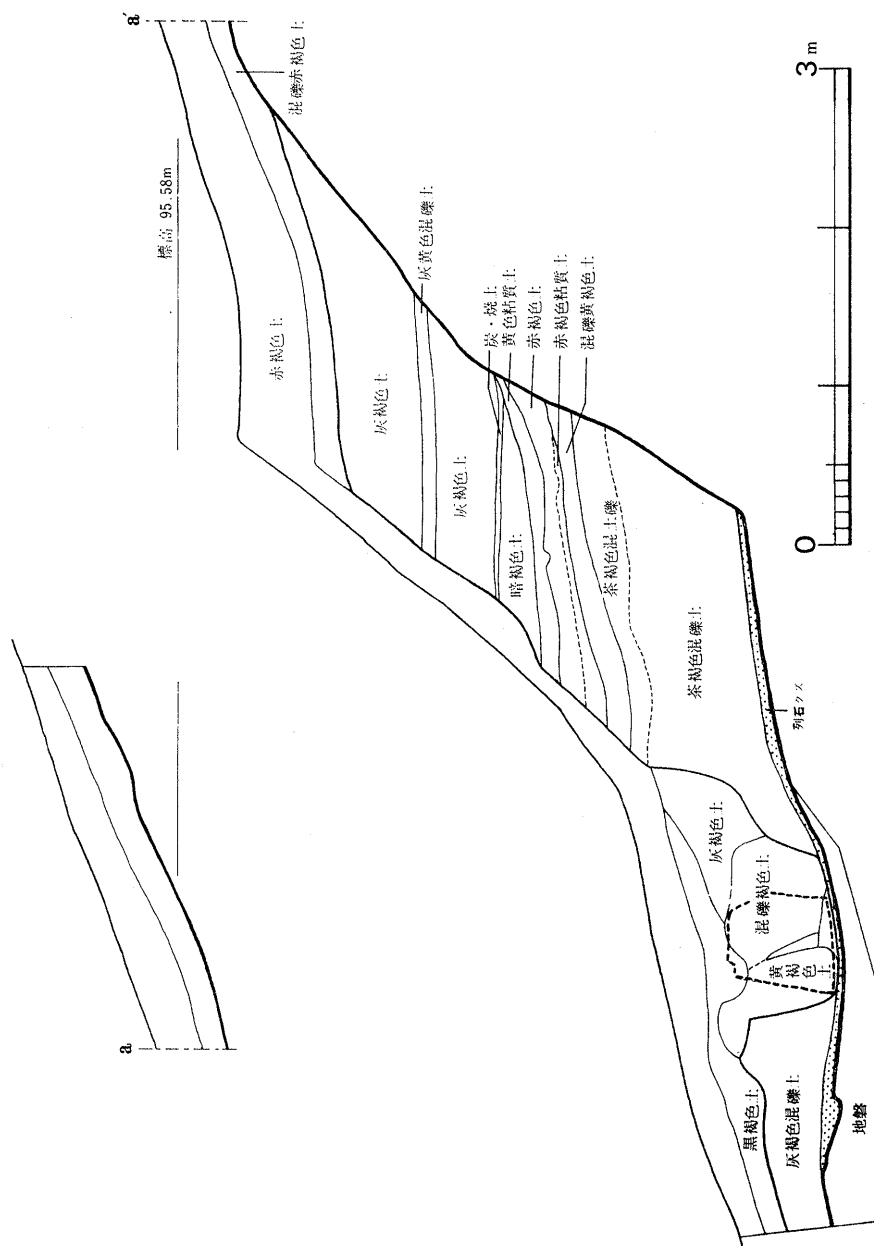


第6トレンチ南壁断面図



第12図 外郭線断面実測図

に企画性に富んでいる。さらに表面の四辺の長さが61.0cm, 60.0cm, 60.0cm, 61.0cmで約 30 cm単位で作られたものと思われる。この石は列石のために加工されたものとは思えず、用途



第13図 第4 トレンチ土層断面実測図

については不明である。列石はトレンチの北壁近くにはなく、断面に抜きとられたような痕跡が認められる。列石の前面には柱穴はなく、しきつめたように列石層が層をなして、列石下および土塁の下にのびている。

このことから土塁・列石の築造過程を推定すると、まず傾斜をもった自然地形を利用し、その一部を削り取って平坦面をつくり、そこで運んできた原石を列石に加工し、その石層を平坦面にしきつめ、地山を切りとった所から約2.5mほど前方に列石を据え、その間に土塁を築いたものであろう。土塁上面は平坦で後部の傾斜面へと続き、土塁の断面は山形にならず、テラス状をなしていたものと思われる。列石の下面からの土塁の高さは3.2mであった。

第5トレンチ（第12図） 第6トレンチと第11トレンチの間に設定した。南に谷を作る頂部近くに外郭線が発見された。外郭線からは土塁の必要がないほど急傾斜で谷に下がる。第6トレンチにかけて山道が通じていて、山道の一部に列石石材と同質の石の露出が認められていたが、土塁の兆候がないため確認の意味で設定したトレンチである。

表土を取ると列石頂部があらわれる。列石背後2、6米で地山が約80㎝掘り下げられて平坦部が作られ列石が設置される。この間には灰褐色粘質土、茶褐色粘質土、褐色土、黄褐色土等が版築状に重ねられている。しかし、土塁としての盛土は認められない。

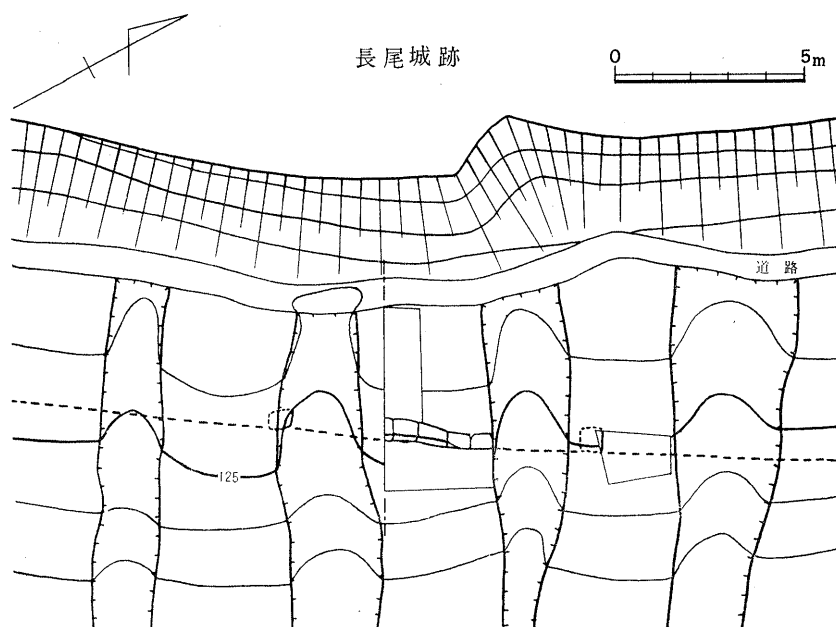


第14図 第4トレンチ出土方形切石

第6トレンチ（第12・15図，図版6—1）標高129.9mの三角点のある平坦な長尾城跡の東側で，約6mさがった地点に第6トレンチを設定した。この場所は，現在雑木が繁茂し見通しが悪いが，穂坂の部落から筑後川の上流が見わたせる場所である。長尾城がこの山に築城されたのも，そのためかと想像される。

列石は，この点からみると南に下り，東は谷をうかいして次の山に登っている。この場所での列石は，長尾城時代に，石落し用に作られたものとみられる3m程の間隔に溝がいく条も掘られてずたずたに切られている。この溝のおかげで列石線は，発掘前の踏査のときにわかっていたので，この第6トレンチは列石前の柱穴の検出を第一とした。列石の前面に幅1m長さ4mのトレンチをもうけて地山までの排土を行って柱穴の検出につとめたが，検出できなかった。杷木神籠石の場合，柱穴が発見されないのは，調査面積が少ないかも知れないが一つの問題を提起している。列石の背後の土層の状況は，石から2mほどのところまで70cm程地山を削り，2～3層の積土をしている。

第7トレンチ 第10トレンチの西，国道に接した所に設定した。国道と筑後川にはさまれた丘陵をとりまく列石線との連絡を知るために設定したのであるが，列石及び土塁等の発見はなかった。



第15図 第6トレンチ付近地形実測図

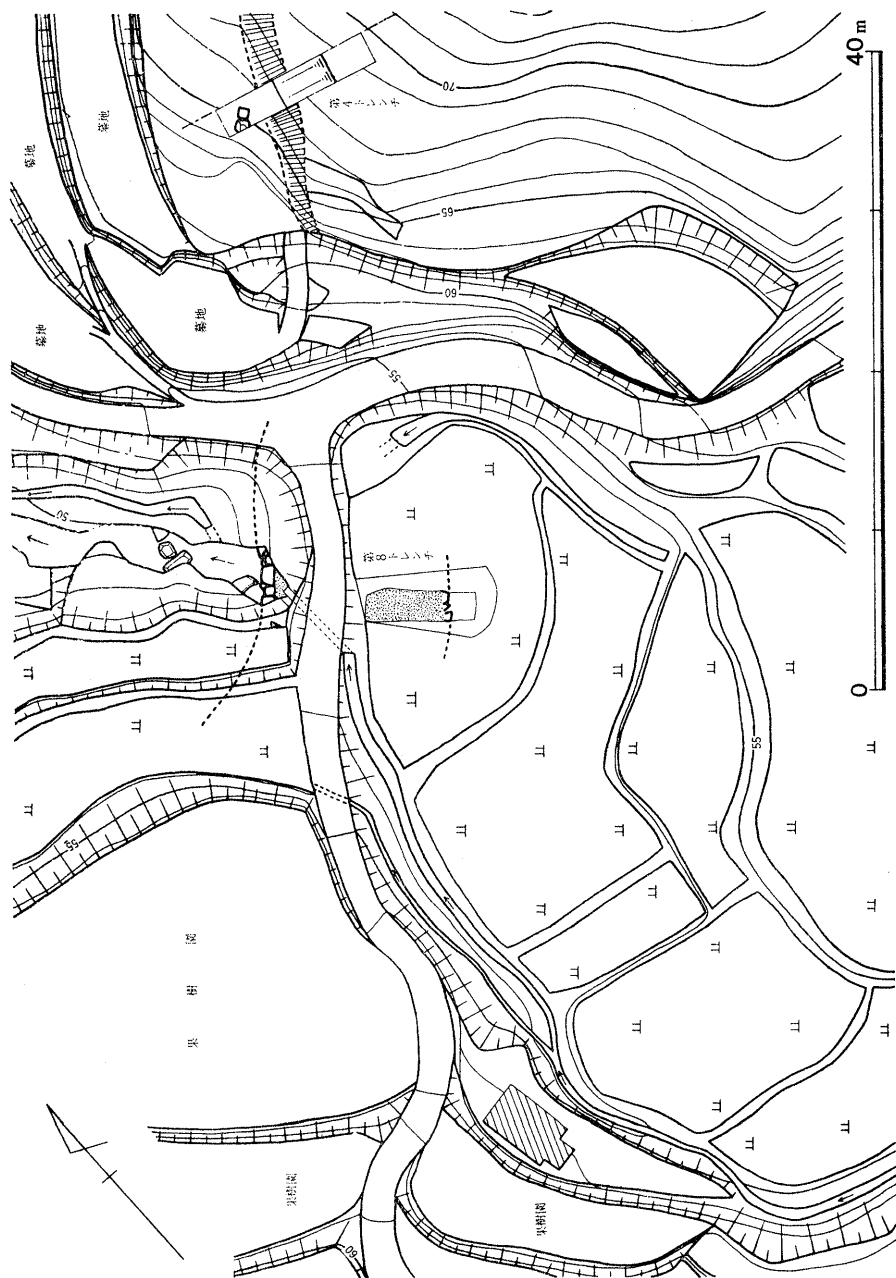
第8トレンチ第Ⅱ水門―(第9・16・17図, 図版3・4) 第Ⅱ水門は、調査以前から確められていた。今日の調査では、1. 附近の地形実測を行うこと。2. 水門の規模をつかむことの二点に重点をおいた。

東林田の東南で筑後川の支流赤谷川に流れこむ小川に、第Ⅱ水門は築かれている。列石線は、南西側標高75mの柿園からゆるやかにおりて、標高50m程で第Ⅱ水門をつくり、東側標高125mの高さまで尾根にそっていきに登っている。西面する水門の前面は、水門が関のようになって、深さ3mの谷を作っている。水門の東側は、農道をはさんで、ゆるやかな谷が200m程奥まで続き、現在階段状に水田がつくられている。

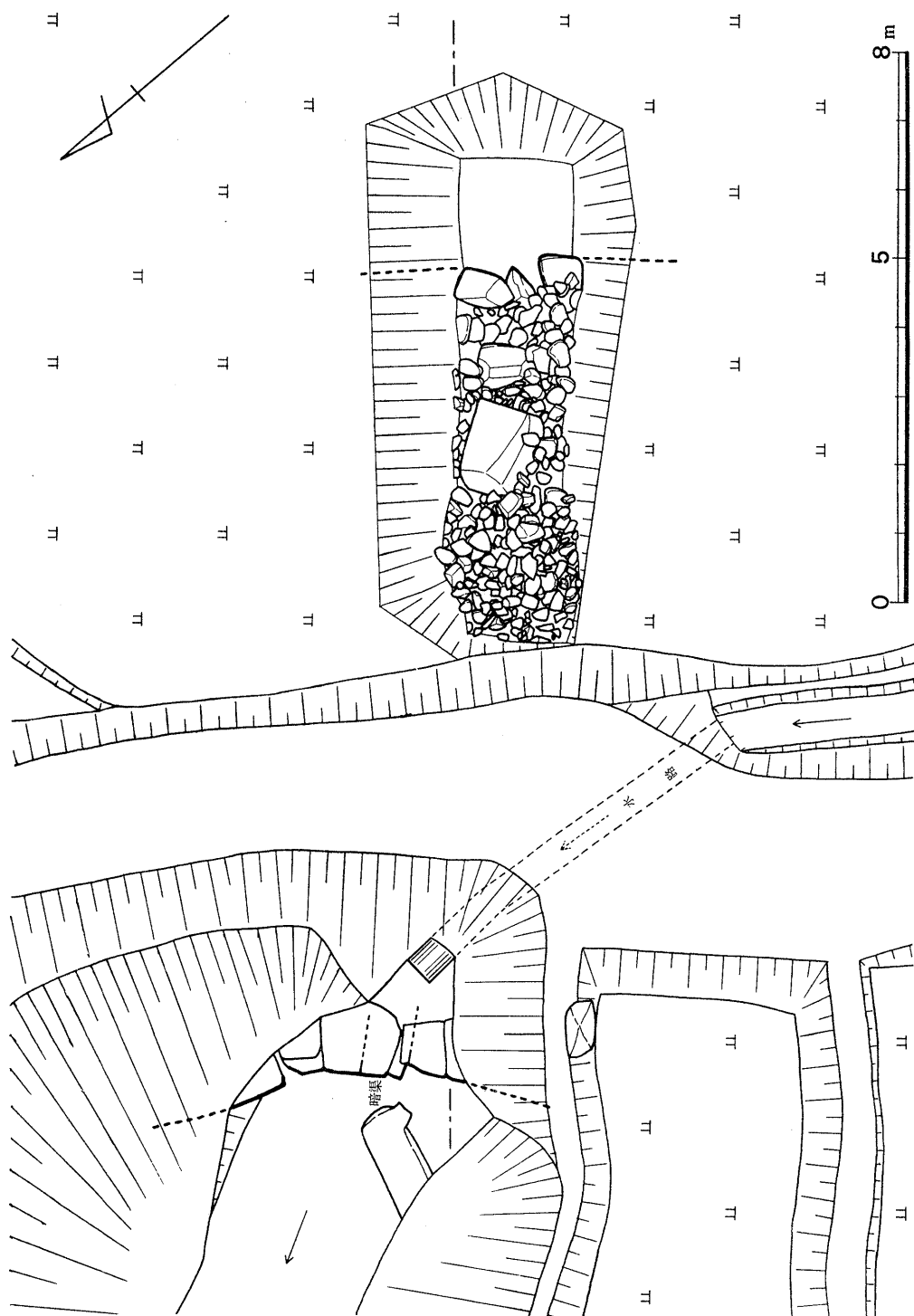
水門の規模をつかむため、水門に直角に農道をはさんで東側の田に幅2m長さ8mのトレンチを設定し発掘調査を行った。発掘調査は、耕土を除くことから始めて、地表下1.3m位いで栗石にあたった。栗石は、径20~30cm程の河原石でトレンチ中に堆積したような状態で検出され、水門前面で高くつまれていて、東端の石の高さと約1mの差がある。この栗石の間に列石に用いられた角閃石の大きな切り石がある。この石と同じ石が栗石がなくなる東端部に、水門の水取口の天井石がころんだような状態で見つかり、横にも同様の石が見つかった。雨でくずれやすいトレンチの状態、水門の裏側の石列までは検出できなかったが、この石の東側では浮いた石しかなく、石質も列石のものと同様であるから、水門の裏端としてあやまりはない。水門前面から11m70cmのところである。

土層の状況は、深さ1m程まで水平堆積が続きその下の土層は、水門の裏端にあたる位置の東側が一番深く、両側は高くなる堆積の仕方をしている。これらの土は、栗石直上の土層を除けば皆、後世の堆積層と推定された。栗石直上の土にも、第4トレンチに見られたような版築の状態はない。また、水門後端石の背後の土層は、泥炭状の砂質粘土で、木片を含んでいたが、加工されたものはなかった。なおこの土の上部から、土師器の口縁部1点が出土している。以上のような発掘状況であるが、1. 水門は、奥行11.7m程であること、2. 水門の上の構築物の痕跡は認められなかったこと、3. 偶然にもトレンチが水取口近くに設定されたこと、などがまとめとして上げられる。

第9トレンチ(第18図) 第Ⅰ水門跡と第Ⅱ水門跡の間に長尾城跡から舌状に張り出した丘陵がある。ここに両水門跡を結ぶ外郭線が通るはずであるが地表観察では大変不明瞭であった。75m等高線(第22図)で囲まれた地域は平坦地で、現在果樹園と畑地になっている。西側の赤谷川に面する斜面は大変な急勾配である。トレンチ設定箇所は極めて少面積でしかも列石の後背部である。これは、列石上面に道があることと、列石前面の発掘承諾が得られなかったためである。幅1m、長さ2mのトレンチであったが、列石2個を確認した。第18図でわかるように後背部は果樹園造成により地下げが行なわれ、土層の状態を知ることはできない。しかしながら第2層の混礫茶褐色土層中には、列石石材の削り屑が混入している。



第16図 第8トレンチ（第Ⅱ水門）及び第4トレンチ付近地形実測図



第17図 第8トレンチ（第Ⅱ水門）付近地形実測図

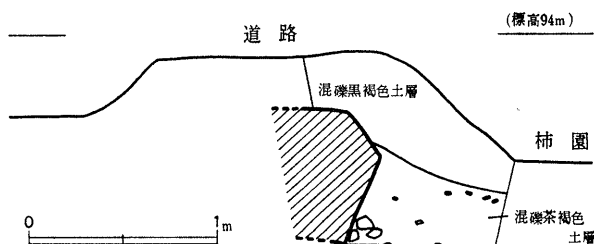
第10トレンチ 県道ぞいの第7トレンチで列石が発見できなかったため、第6トレンチとの間でもう一個所列石を確認する必要がある。それで第7トレンチを東にのぼった標高85mの地点に列石らしきものが発見されたので、その地点を調査することにした。発掘

の結果発見された列石は1個のみであったが、全体的な列石想定線からこの地点に列石が設置されていたであろうことは十分に考えられる。南側は水田面まで急傾斜地で、自然の要害になっている。

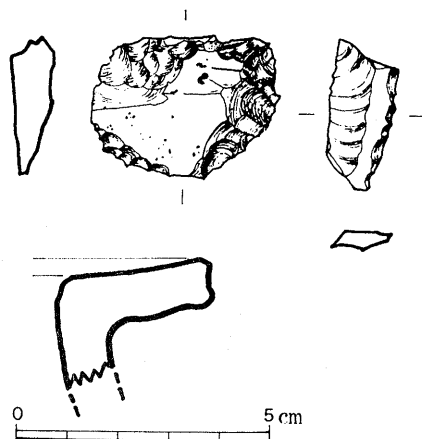
第11トレンチ (第9・20図, 図版6—2)

長尾城跡から谷をへだてて東側の腕を伏せたような小山の南斜面標高229m程のところに第11トレンチを定めた。この腕を伏せたような小山は、現在、雑木が切り開かれて杷木神籠石のどの地点よりも眺望がきく。眼下の田で働く人の姿から筑後川をへだてて浮羽郡の浮羽・吉井町、耳納水繩山脈から遠く高良山までも望むことが出来る。

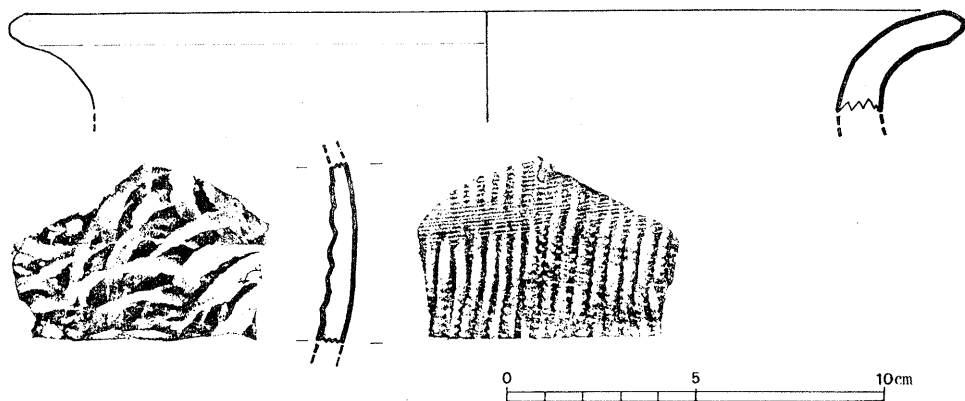
この附近での列石線は長尾城跡から谷をう



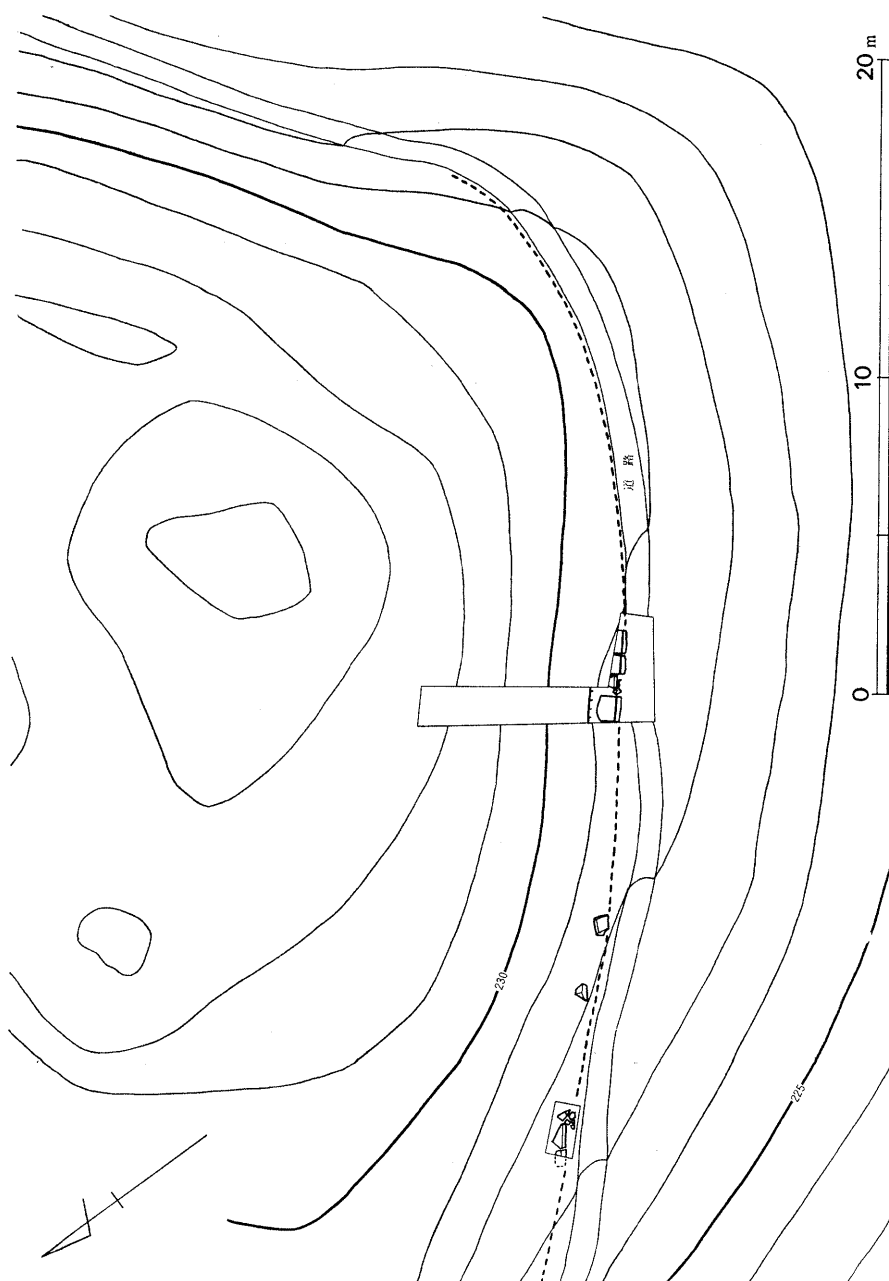
第18図 第9トレンチ断面実測図



第19図 採集遺物実測図



第20図 出土遺物実測図



第 21 図 第 11 トレンチ付近地形実測図

かいしてすこしずつ高くなり、この独立した山の東斜面をめぐる一度尾根づたいにおりて次の山に再び登っている。

この第11トレンチは、山の傾斜面と列石との関係、列石前面の柱穴の有無などが調査の目的であった。その結果、山の傾斜面にもうけたトレンチからは、まったく積土はみられなく、列石のすぐ背後を垂直に地山を削りとして石を並べている。また、列石の前面の幅1m×長さ3.5mのトレンチでは、柱穴を探すべく、地山までの排土を行ったが、柱穴は検出できなかった。ただ、ここでは、地形を利用をして列石を並べているだけのようである。

出土遺物（第19・20図）

今回の発掘調査による出土遺物は、土師器片1点（第8トレンチ、泥炭状土層上部出土）と須恵器片1点（第4トレンチ、表土中）の2点である。

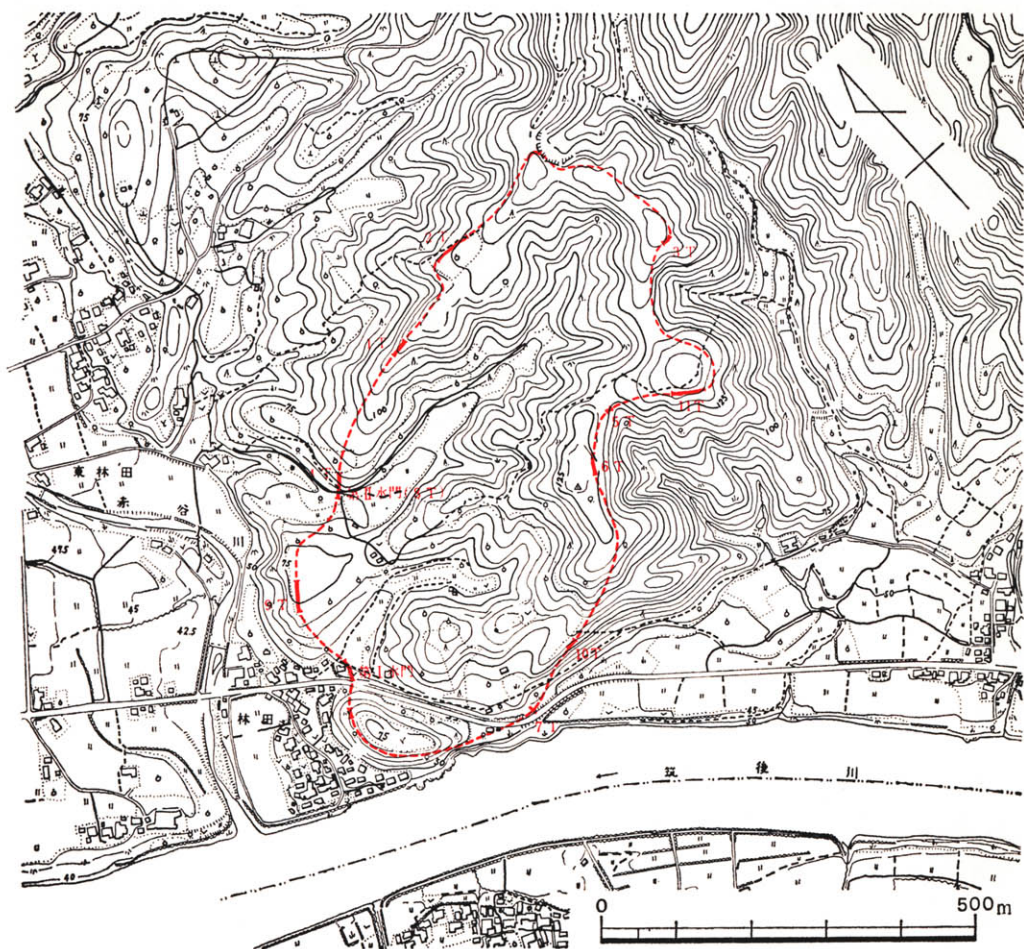
土師器は、甕形土器の口縁部である。砂を含むが焼きは良い。

須恵器は、甕形土器の胴部であろうか、内外とも叩目がある。灰色で焼きも良い。2点の出土遺物は、いずれも神籠石とは無関係である。

この外に第9トレンチ附近の果樹園で黒曜石の破片と、弥生中期の甕形土器の破片が、採集されている。

2. 外 郭 線 の 概 要 （第22図、図版1—1）

まず、杷木神籠石が発見された鵜ノ木城跡がある小山は、急傾斜をなして筑後川に面している。筑後川は一種の外堀の役目をしている。このように川という自然地形を利用した例は他の神籠石にみられないところである。列石はこの小山を北にまわり県道をよこぎると小さな谷口に出る。ここに第Ⅰ水門を築造し、列石を次の山へとつないでいる。第Ⅰ水門から北へのぼると東側はやや広い平坦地になり、そこでは黒曜石片、弥生中期土器片が散布している。しかし列石の西側は高さ約30m程の急斜面になっている。この山を東の方へまわりながらくだると奥行が深い谷に出る。ここに第Ⅱ水門を築いている。第Ⅱ水門からは北の山の稜線へ急にのぼりあがる。西へのびる山の稜線にそってゆるやかにのぼるこの付近の土塁は比較的良好に残っていて、列石線の北側は急傾斜面になっている。この稜線をのぼって標高約145mの所で南に曲がる角があり、この附近では列石の残存がよい。尾根づたいにすすみ第3トレンチまでの間、この列石線のなかでも標高が一番高い。さらに南へ一度くだると南西方向につきでた腕をふせたような山へのぼっていく。このあたり雑木が切りはらわれているため、夕方になり山肌に陰影がつきはじめると、土塁線の姿をはっきりとみることができる（図版7）。第11トレンチを設けた山頂からの見晴らしは素晴らしく、眼下に流れる筑後川とそのむこうに広がる平野、そして背後の耳納山脈が一望のもとにみわたせる。列石線はこの山の南側をまわり西へ方向をかえる。さらに第5トレンチ付近で南へ方向をかえ、長尾城跡の東側を通りぬける。この長尾城



第 22 図 杷木神籠石地形図

跡のある山頂は、さすが城跡だけに東側は急傾斜地で自然の要害となっていて、また南の平野をみわたす絶好の地でもある。ここを過ぎると急激にくだり、もとの鷯ノ木城跡がある小山へ続いている。

このように神籠石の列石・土塁は、中に谷を二つ含む山の稜線にそってつくられ、その形は南西方向に向いた長径800m、短径約400mの楕円形をなし、その高低差は約90mである。この列石線の全長は約2250mで、その中には2箇所の水門を含んでいる。また列石線の外側は全周急な傾斜地であり、南に筑後川をひかえ、山城としては自然の要害をうまく利用しているといえることができる。

4 外郭線使用列石の石質

1. 列石の岩型分類

列石として使用された岩石は、岩石学的な大きさを分類からいえば、すべて安山岩質火山岩に属し、凝灰角礫岩と熔結凝灰岩が主なものである。これらを、さらに細かく岩石標本の単位で岩石種（岩型）としてみれば、次の5つの岩型に分けることができる。

A型：凝灰角礫岩

B型：凝 灰 岩

C型：中粒，含斜方輝石一角閃石安山岩質熔結凝灰岩

D型：中粒，擬流状，含斜方輝石一角閃石安山岩質熔結凝灰岩

E型：粗粒，斜方輝石一角閃石安山岩

2. 各トレンチにおける列石の岩型と個数

前記の岩型が，列石としてそれぞれの位の割合で使用されているかを推定するために，各トレンチに出現した列石の岩型とその数を検討し，表に表した。

トレンチ \ 岩 型	A	B	C	D	E
鵜の木城跡(ドライブイン)			7		
T 1	○				
T 2	13				
T 3					
T 4					2
T 5	2				
T 6	3	1			1
T 8	1		2		
T 9			○		
T 10	1				
T 11	3			1	
第 II 水 門	5 ~ 6	1			

(注) ○印：詳細な数が不明

上の表から明らかなように，列石としては，A型の凝灰角礫岩とその類似岩が最も多く，次いでC型の熔結凝灰岩とその類似岩，そして，熔岩が最も少ないということになる。

3. 各岩型の岩質

A型，凝灰角礫岩 径15~20cm位より小さい安山岩質の角張った岩塊（角礫）が，凝灰岩

質の基地中に含まれている。その角礫の量は、基地より多いもの少ないものさまざまである。基地の岩質は、次に述べる「凝灰岩」と同質である。風化作用に対する抵抗力が、一般に安山岩質角礫の方が基地よりも強いので、列石の表面に角礫が突き出していることが多い。

B型・凝灰岩 最大2～3mm大の斜長石や角閃石および最大5～6mm大の安山岩片を20～30%位い含んだ褐灰色の岩石である。

斑状結晶としては、破片状の斜長石が最も多く、次いで緑褐色普通角閃石である。それから黒色鉄鋼と、わずかに普通輝石および斜方輝石を含む。基地の部分は、主としてガラス質物質からなり、その中に、細い破片状あるいは拍子木状の斜長石や長柱状の角閃石が含まれている。

岩石片はほぼ同質の安山岩である。

C型・中粒、含斜方輝石一角閃石安山岩質熔結凝灰岩 一見、熔岩のような外観を呈する褐灰色の岩石で、割合に脆く、軽い。斑状鉱物の多くは、最大2～3mm大の斜長石と角閃石で、約数10%を占め、ほぼ均等に基地中に散在している。ある列石（T8）では、斑状鉱物がより小形で最大2mm位いのこともある。

斑状斜長石は、ほとんどすべて破片状で、他形～半自形を示し、新鮮で透明である。ときには、周縁部が部分的に熔融して、ガラス化しているものも存在する。累帯構造を示す結晶や双晶が多い。

普通角閃石は褐緑色を呈し、小形のものは不規則な破片状で、大型のものが自形柱状結晶のことが多い。

このほか、黒色鉄鉱と、ほとんど無色の斜方輝石を含む。またときどき、安山岩質岩片やまれには黒色泥岩質岩片が散点している。

基地の部分は、三日月状、スポンジ状の淡褐色のガラス片、無色で黒い縞をもった浮石、その間をうめるほかのガラス質物質からできている。三日月状あるいはスポンジ状のガラス片は、斑状結晶の間に挟まれたり、結晶の縁に沿って曲げられたりして、全般的に、細長く、押し延ばされたような形を示している。しかしその程度はそう著しいものではない。浮石質物質も、レンズ状というより、不規則形のものが多い。このような基地における性質は、熔結凝灰岩の特徴である。

D型・中粒、凝流状、含斜方輝石一角閃石安山岩質熔結凝灰岩 肉眼で見て、斑状鉱物の斜長石や角閃石がほぼ平行に配列し、また基地の淡褐色ガラス片が細長く押し延ばされて、平行に並ぶ傾向を強く示している。そして、浮石片も多くはレンズ状を示す。

これらの相違点以外は、C型のものに性質がよく似ている。

E型・粗粒、斜方輝石一角閃石安山岩 最大約5mmに達する斜長石・普通角閃石・斜方輝石の斑晶が、比較的多く、熔岩の一種である。ときには火山岩片も含まれている。

斑晶鉱物の斜長石は、半自形～自形で、新鮮であるが、ときに結晶縁の一部がガラス化して

いることがある。普通角閃石は緑褐色種で、斜方輝石は淡色であるが、独特の多色性を示す。

石基はガラス質で、細い柏子木状斜長石と長柱状普通角閃石を含んでいる。

4. 列石に使用された岩石の産出地

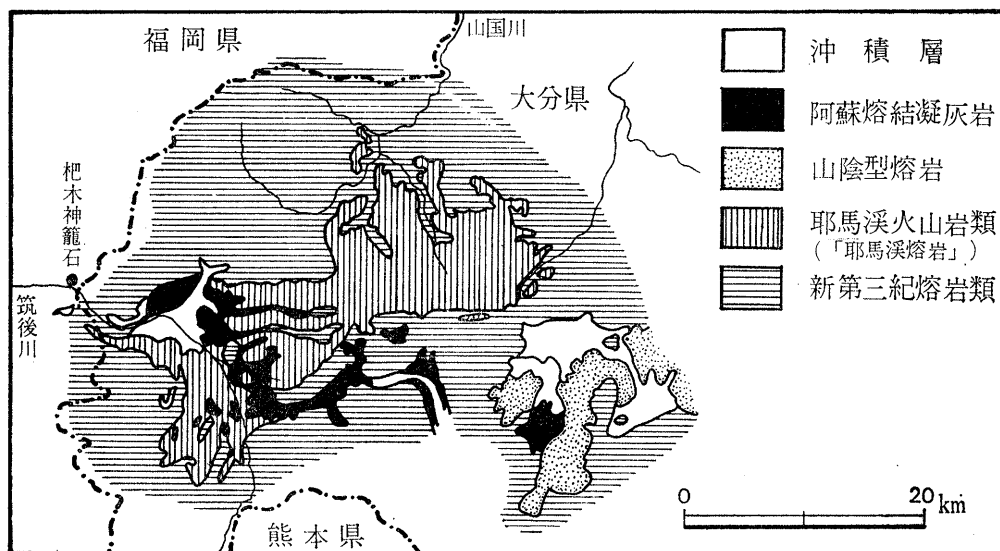
列石に使用された岩石は、前述のように、すべて安山岩質の火山岩で、ほとんどすべてが凝灰角礫岩と熔結凝灰岩である。岩石学的にみれば、この種の岩石は、火山岩分布地域において、同一場処と一緒に相伴って産出する性質をもっている。

前記のような性質をもった凝灰角礫岩および熔結凝灰岩は、いわゆる「耶馬溪熔岩」と従来呼ばれているものの中の一部に極めてよく類似している。これは付図に示すように、杷木町の東方、日田・玖珠・耶馬溪一帯にかけて広く分布している。

「耶馬溪熔岩」の岩石は、新第三紀の変朽安山岩や筑紫熔岩の上に重なって産出するし、いわゆる「阿蘇熔岩」（正確には熔結凝灰岩の一種）よりも古い時代のものであって、その生成時代は両者の中間に当る洪積世といわれている。あの耶馬溪の景勝は、「耶馬溪熔岩」なるものが、非常に雑多な火山岩から構成されていて、風化・侵蝕作用に対する抵抗力が部分によって不均質となったためと考えられている。

「耶馬溪熔岩」は、岩石学的にはまだ本格的に研究されていないが、主として安山岩質の凝灰角礫岩（集塊岩を含む）・凝灰岩・凝灰質泥岩・熔結凝灰岩・熔岩などから構成されている。中でも、凝灰角礫岩と熔結凝灰岩が優勢のようである。

こうして、神籠石列石が耶馬溪火山岩類の分布地域（第23図）内のどこから切り出されたものであることは容易に推定できる。しかし、その中のどの地点かは、この火山岩分布地域の詳細な野外調査が必要である。



第23図 耶馬溪火山岩類分布図

5 お わ り に

以上が杷木神籠石発掘調査の概要である。調査面積は極めて少なく、かつ、調査が杷木神籠石の外郭線の探索にあったためにその性格を十分知ることとはできなかった。したがってここでは、今回の調査から知りえた結果にもとずいて杷木神籠石の特色を述べ、また全神籠石が直面している問題点に若干触れておわりとしたい。

前に述べたように杷木神籠石は、大分県との県境にある。筑後平野が筑後川に添って細く延び、山間が狭ばまった一角に所在している。郭内の山頂に立つと筑後川の流れとともに、筑後平野を広々と見わたすことができる。帯隈山神籠石と高良山神籠石及び帯隈山神籠石と女山神籠石が互いに遠望することができるように、この杷木神籠石からも高良山神籠石を望むことができる。

また、杷木神籠石は、筑前・筑後と豊前・豊後を結ぶ交通路上にあって、延喜式に杷伎駅の名が見られる。

(1)

筑前国駅馬 独見。夜久各十五疋。嶋門三疋。津日廿二疋。席打。夷守。美野各十五疋。久爾十疋。佐尉。深江。比菩。額田。石瀬。長丘。杷伎。広瀬。隈崎。綱別各五疋。

伝馬 御笠郡十五疋。

古代交通路の要点にあるといえる。

水門跡は2ヶ所に設けられている。門跡は列石線全てを露出しなければ表面観察ではその所在を知ることとはできない。

土塁については、おつぼ山・帯隈山・石城山各神籠石にあるような薄く積み重ね・築き固められた所謂版築とよばれる状態ではなく、積み重ねた程度の状態である。わずかに、第4トレンチにおいてはその状態に近いといえるが、他の調査個所においては版築という言葉は該当しない。調査個所の説明のなかで、便宜上版築としたところがあるがここで訂正しておきたい。

列石の形態は、他の神籠石で普遍的に見られる形態、つまり列石前面上端に平坦な調整面が明瞭に観察できるものは少なかった。国道と筑後川にはさまれた地域から削平工事によって発見された列石は(図版8)特に顕著に見られるが、調査区においては見られなかった。

また、帯隈山・女山・おつぼ山・石城山各神籠石には列石前方に柱穴が発見されている。

今回の調査においても、この柱穴を確認するために第2・6・11トレンチにおいて列石に添ってトレンチを拡張したが、発見できなかった。

第4トレンチ附近における土塁は、土塁として良好な状態にあるので、ここにおいて柱穴の探索を行ないたいと考えていたが、果樹園でもあり拡張することはできなかった。

また、この第4トレンチにおいて、高31cm、一辺60cmの方形プランの、列石に使用されるものとは考えられない形態の切石が発見された。石質は列石石材と同種であり当遺跡に関連す

るものであるが、どのような用途を果したものかわからない。

杷木神籠石外郭線の地形の取りかたは、他の神籠石と特に異ったところはない。

二つの谷を取り入れそれぞれに水門を作っている。郭内で最も高い所は標高約 245m で御所ヶ谷・高良山神籠石にほぼ等しい。外郭線の推定延長は約 2250m で鹿毛馬神籠石と等しい。

杷木神籠石の一つの特色は、筑後川が当遺跡に接して流れていることで、城としての防衛にとっては大変有利な地勢を占めている。中世の山城、長尾城跡・鶴ノ木城跡が郭内に遺存している事実は、この地形的要因を大きく物語っているといえる。

さて、今回発見の杷木神籠石を加えると全国に 9 ケ所の神籠石を数えることができる。しかしながら、これら神籠石は、いつ唯れが、どのような目的で築城したものか解決されていない。築造年代についても種々の説が考えられている。大きく分けると①つは邪馬台国の頃、②つには 6 世紀、岩戸山古墳に関するものではないかという説、③つには、7 世紀前半とする説、④つには、7 世紀中葉より遡らなく、大宰府政庁跡や大野城跡及び基肄城跡とはほぼ同時期とする説の四説がある。

②は坪井清足氏の説で、岩戸山古墳が高良山神籠石と女山神籠石のほぼ中間に在ることから、これによって割り出される距離をもって各神籠石間を測るとほぼ等間隔に近いこと（これには今後新しく神籠石が発見されることをも予測してのことと思われる）と、加えて筑紫国造磐井の勢力範疇に神籠石が分布していることから考えられた説であろう。しかしながら、この説には山口県に所在する岩城山神籠石の存在をどう考えるかが大きな問題として残される。

④は鏡山猛先生の説で、おつぼ山神籠石の列石前面にある柱穴による柱間及び土塁の幅並びに水門跡の幅から割り出された数値により、唐尺の使用を考え「一般に日本における唐尺の使用は大化以降と考えられており、7 世紀中葉より遡っての使用は考えられない。とすれば大宰府の建置の頃紀元 664 年にほど近い年代が上限として求められる。」とする説である。昭和 43 年福岡県教育委員会は(6)大宰府政庁跡の発掘調査に着手し、現在南門・中門跡の発掘調査を継続しているが、創建当初のものと考えられていた礎石は 10 世紀初頭をさかのぼるものではないという結果が判明した。さらに現在に至るまでに数回の建てかえが考えられると予測している。(7)大宰府政庁創建当初の尺度とは若干の相違が起ってくることも考えられる。しかしなお、大野・基肄城跡に関しては④説を裏付ける根拠にはなり得る。

③は斉藤忠博士の説で、基肄城跡・大野城跡・城山山城跡と石垣や通水溝とが類似していることをあげ「神籠石式山城跡の方が朝鮮式山城跡にくらべると、粗朴な洗練されない技術が指摘される。基肄城等の朝鮮式山城跡に年代は接近しておりながら、これよりもさかのぼることは明かである。一方、神籠石式山城のもつ列石や石壁の排水溝の構築などは、古墳に見られる横穴式石室の終末の頃の技術と共通したものがある。」また前記唐尺については「一步譲って唐尺の使用されたことを認めても、この種神籠石式山城に直接百済とか任那からの技術者が参加

していたとすれば、唐尺の使用はこれより早く用いられたと考えても差支えない。」と述べ、7世紀の中頃か7世紀の前半のある時期に築城されたものと主張されている。

(8)

③・④の説は大変有力なものと考えられる。

神籠石の発掘によって、その築造年代を積極的に限定し得る共伴遺物の発見は少ない。

昭和43年再び帯隈山神籠石の発掘調査が実施された。この時、帯隈山々頂と北門跡との中間位置を通る外郭線と重複して陶棺が発見されている。報告書には陶棺の細かな説明がなく、時期の判定はできないが、特筆すべきことはこの陶棺を破壊して神籠石が築造されているという事実である。九州にはこの種陶棺の例は極めて少ないが、一般に主として陶棺は古墳時代後期に作られている。帯隈山神籠石の上限を知る上にも貴重な事実である。

調査終了後この陶棺は埋め戻されたというが、大変適切な措置とであったと考える。再びこの陶棺の学術的調査が行なわれることを強く望む次第である。

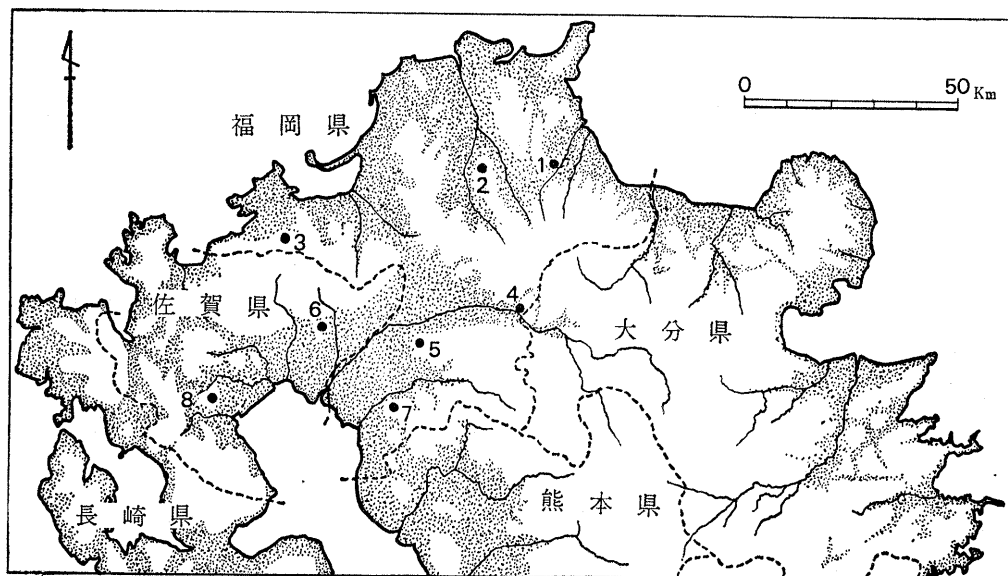
また、おつぼ山神籠石発掘調査によって、東門跡付近から炭化した木柱と第1水門跡から柱根が発見されている。これらのC14の測定を行なうことも、年代決定の手掛りになると考える。

全国に9ヶ所所在する神籠石についての歴史的記録は見当たらないが、日本書紀に何を指すものであるかわからない記事がある。持統天皇三年(689)九月の条で

(10)

九月庚辰朔己丑。遣直廣参石上朝臣磨。直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫₁。給₂送位記₁。且監新城₂。

とある。この新城なるものが何を意味しているかを究明することも大きな課題であると思う。



第24図 九州における神籠石分布図

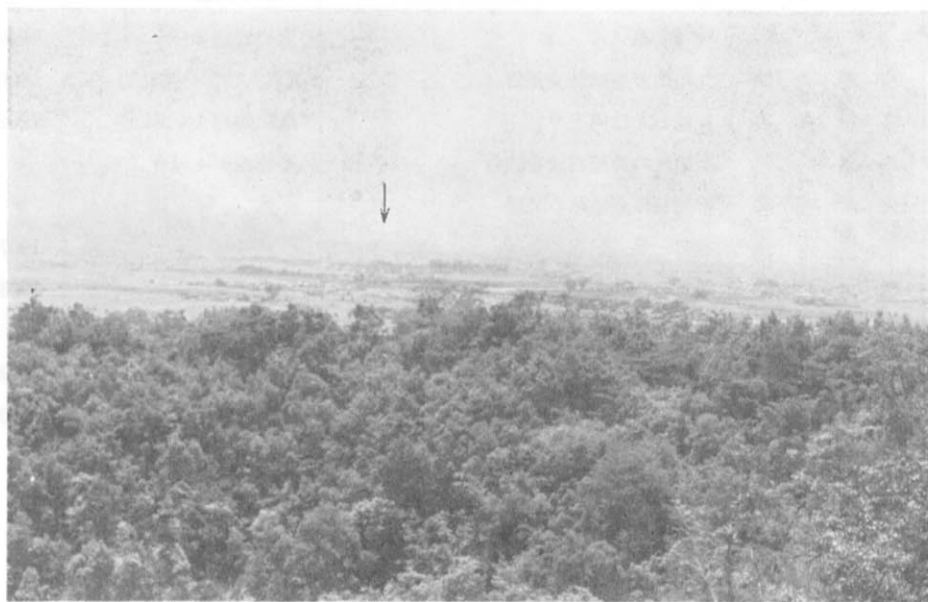
神籠石築城年代の決定は、自から築城者及び築城目的を解決することであり、今後の研究に期待するところである。

神籠石は、明治31年小林庄次郎氏により学界に初めて紹介され、この時から「神籠石」なる名称が使用されるにいたったのであるが、⁽¹¹⁾「神域説」と「城塞説」の論争も、おつぼ山神籠石発掘調査によって城塞として立証された。神籠石なる名称もその性格が明らかになった以上名称を改める必要があると考える。

古賀寿氏は、神籠石なる名称は本来高良山に所在する馬蹄石を指すものであって、列石をいうものではないと主張されている。⁽¹²⁾

齊藤忠博士は「神籠石式山城」と呼称されている。⁽¹³⁾現在では妥当な名称であろうが、まだ考慮する余地がありそうである。

- 注 1 黒板勝美編輯「延喜式卷28, 兵部省」国史大系第二部10 (1961)
- 2 関野貞「所謂神籠石は山城跡なり」考古学雑誌 4—2 (1913)
- 3 坪井清足「城柵の設置」世界考古学大系 4 (1961)
- 4 齊藤忠「日本古代遺跡の研究—第三章城柵跡—」(1968)
- 5 鏡山猛他「おつぼ山神籠石」佐賀県武雄市調査報告 (1965)
- 鏡山猛「日本の考古学Ⅶ—Ⅳ城塞, 1 古代の城塞・二西日本—」(1967)



第 25 図 筑後平野と高良山神籠石を望む

6. 前掲「おつぼ山神籠石」
7. 藤井功・亀井明德「大宰府史跡」福岡県文化財調査報告書第40集（1969）
8. 註4に同じ
9. 佐賀市教育委員会「帯隈山神籠石東北部調査概報」（1969）
10. 黑板勝美編輯「日本書紀卷30」国史大系第1部2（1964）
11. 小林庄次郎「筑後国高良山中の神籠石なるものに就いて」人類学雑誌14—53(1898)
12. 古賀寿「高良山神籠石研究序説—『神籠石』なる名称の由来と明治以前の研究史」（1967）
13. 註4に同じ。

なお、神籠石研究の便宜を計るために、次に文献目録を付しておく。この作成に当っては大類伸・鳥羽正雄「城郭及城跡」（考古学講座第9巻）・鏡山猛他「おつぼ山神籠石」・斉藤忠「日本古代遺跡の研究」に依るところが多かった。また、筑紫豊先生にも種々御示教をいただいた。

№	著 者 名	文 献 名	掲載書名その他	発行年
1	伊 藤 常 足	筑後之三・御井郡ノ上・高良玉垂命神社	太宰管内志	1831
2	矢 野 一 貞	高 良 山	筑後国郡志	1862
3	小 林 庄次郎	筑後国高良山中の神籠石なるものに就いて	人類学雑誌14—153	1898
4	〃	神 籠 石	歴史地理2—9	1900
5	八 木 奘三郎	九州地方遺跡調査報告	東京人類学会雑誌15—173	1900
6	喜 田 貞 吉	神籠石とは何ぞや	歴史地理4—5	1902
7	八 木 奘三郎	喜田氏の神籠石論を読む	歴史地理4—6	〃
8	久 米 邦 武	神籠石は全地球の問題	〃 4—10	〃
9	杉 山 正 格	校訂 筑 後 志		1907
10	伊 東 尾四郎	豊前京都郡の神籠石及石城に就きて	歴史地理11—5	1908
11	八 木 奘三郎	両筑の古物遺跡	国学院雑誌14—5	〃
12	喜 田 貞 吉	神籠石概論	歴史地理15—3	1909
13	森 田 鉄三郎	ストーンヘンジとストーンサークル	歴史地理 〃	1910
14	喜 田 貞 吉	神籠石号の発刊に就て	〃 〃	〃
15	宮 崎 栄 雅	豊前国京都郡御所ヶ谷神籠石探険記	〃 〃	〃
16	藤 井 甚太郎	筑紫における上代城郭の形式を論じて神籠石に及ぶ	〃 〃	〃
17	大 類 伸	本邦古代の城郭と神籠石	〃 〃	〃
18	藤 井 甚太郎	神籠石参考資料	〃 〃	〃

№	著 者 名	文 献 名	掲載書名その他	発行年
19	柳 田 国 男	神籠石に係る地名	〃 〃	〃
20	八 木 奘三郎	神籠石と城郭	〃 〃	〃
21	久 米 邦 武	鳥見霊時と神籠石	〃 〃	〃
22	井 上 頼 文	神籠石より起れる国名	〃 〃	〃
23	犬 峰 他二人	神籠石探検膝栗毛	〃 15—4	〃
24	喜 田 貞 吉	筑後平野と高良山神籠石	〃 〃	〃
25	犬 峰 他二人	神籠石探検膝栗毛	〃 15—6	〃
26	喜 田 貞 吉	周防国熊毛郡石城山神籠石探検記	〃 15—7	〃
27	喜 田 貞 吉	神籠石と盤境	歴史地理16—3	〃
28	中 川 泉 三	近江国醒ヶ井村に発見せる神籠石様の列石	〃 〃	〃
29	〃	近江国醒ヶ井における神籠石に類せる遺跡	考古学雑誌 1—2	〃
30	藤 井 甚太郎	近江国醒ヶ井村神籠石様の列石	歴史地理17—3	1911
31	柳 田 国 男	神籠石に就いて	〃 16—4	〃
32	喜 田 貞 吉	所謂神籠石は果して山城か	〃 20—4	1912
33	谷 井 濟 一	日本上世山城の周囲には土壁をめぐらしたるべし	考古学雑誌 4—2	1913
34	〃	日本上世山城廃址考略	〃 〃	〃
35	押 上 森 蔵	谷井氏の土壁云々に就いて	〃 〃	〃
36	関 野 貞	所謂神籠石は山城址なり	〃 〃	〃
37	大 類 伸	「神籠石」問題解決尚早論	〃 〃	〃
38	喜 田 貞 吉	神籠石は山城にあらざるべし	〃 〃	〃
39	〃	神籠石非山城址補説	〃 〃	〃
40	考 古 学 会	山城跡（神籠石）研究参考図集		〃
41	谷 井 濟 一	神籠石等は遺跡学（考古学）上よりみて山城跡たる事明かなり	考古学雑誌 4—6	〃
42	〃	日本上世前期山城址（神籠石等の問題に関連して大類学士に報ゆ）	〃 4—8	〃
43	大 類 伸	白鳥博士の神籠石論に就て	歴史地理23—1	1914
44	喜 田 貞 吉	近時発表せられたる神籠石論を読む	〃 23—2	〃
45	中 山 平次郎	朝鮮式山城跡の発見	歴史地理23—4	〃
46	渡 辺 村 男	耶馬壹国探見記		1915
47	白 鳥 庫 吉	所謂神籠石に就いて	史学雑誌 29	1917
48	嘉 穂 郡 役 所	嘉穂郡誌		1924
49	武 藤 直 治 石 野 義 助	高良山神籠石	福岡県史跡名勝天然記念物調査報告 1	1926
50	福岡県山門郡教育会	山門郡誌		〃
51	福岡県糸島郡教育会	糸島郡誌		1927

No.	著 者 名	文 献 名	掲載書名その他	発行年
52	大 類 伸 鳥 羽 正 雄	城郭及城址	考古学講座第9(雄山閣)	1928
53	武 藤 直 治 石 野 義 助	高良山神籠石	福岡県史跡名勝天然記念物調査報告 5	1930
54	石 野 義 助	筑後女山神籠石	〃 10	1935
55	村 上 磐太郎	石城山神籠石私見	周東文化研究会2回報告	1942
56	福岡県高等学校 教職員組合	北九州古文化図鑑 2		1951
57	駒 井 知 愛	考古学概説		〃
58	吉 村 茂三郎 七 田 忠 志 松 尾 禎 作	帯隈山神籠石	佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告 10	1951
59	竹 内 理三監修	神 籠 石	福岡県の歴史	1956
60	中 田 薫	古代日韓交渉史断片考		〃
61	佐賀県教育委員会	佐賀県下の文化財		1956
62	鏡 山 猛	北九州の古代遺跡	日本歴史新書	1956
63	柳川郷土史刊行会	柳川史話 2		1956
64	松 尾 禎 作	帯隈山神籠石と縁城	佐賀県考古大観	1957
65	原 田 大 六	神籠石の諸問題	考古学研究6—3	1959
66	田 熊 文 助	石 城 山	石城山青少年訓練所	1960
67	坪 井 清 足	城柵の設置	世界考古学大系4	1961
68	佐賀県教育委員会	帯隈山神籠石	佐賀県の文化財	〃
69	鏡 山 猛	西日本に於ける上代の築城	日本城郭全集1	〃
70	原 田 大 六	雷山神籠石の列石考	古代学研究 28	〃
71	太 田 亮	高良山史		1962
72	小 田 富士雄	佐賀県おつぼ山神籠石の調査	九州考古学 19	1963
73	文化財保護委員会	石城山神籠石第一次調査概要		1963
74	〃	〃 第二次 〃		1964
75	斉 藤 忠	神 籠 石	月刊文化財4月号	〃
76	小 田 富士雄	佐賀県帯隈山神籠石の発掘調査	九州考古学23	〃
77	佐賀県教育委員会	佐賀県の遺跡		〃
78	文化財保護委員会 記念物課	石城山神籠石の発掘調査	月刊文化財3月号	1965
79	鏡 山 猛 他	おつぼ山神籠石	武雄市教育委員会	〃
80	〃 〃	帯隈山神籠石とその周辺	佐賀県文化財調査報告16	1967
81	古 賀 寿	高良山神籠石研究史序説		1967
82	霧 久 嗣 郎	郷土の文化財	久留米市教育委員会	〃
83	鏡 山 猛	古代の城塞	日本の考古学 7	〃

No.	著 者 名	文 献 名	掲載書名その他	発行年
84	福岡県教育委員会	福岡県の文化財		1968
85	斉 藤 忠	日本古代遺跡の研究		〃
86	佐賀市教育委員会	帯隈山神籠石東北部調査概要		1969
87	金 錫 享	古代朝日関係史	朝鮮史研究会訳	〃
88	神 埼 町	帯隈山神籠石天童山東部調査概報	佐賀県神埼郡神埼町教育委員会	〃

神 籠 石 一 覧 表

No.	名 称	所 在 地	外郭線長(杆)	最高所標高(米)
1	石 城 山	山口県 熊毛郡 大和村	2.5	352
2	御 所 ケ 谷	福岡県 行橋市	2.6	250
3	鹿 毛 馬	〃 嘉穂郡 額田村	2.2	80
4	雷 山	〃 糸島郡 前原町	2.3	400
5	杷 木	〃 朝倉郡 杷木町	2.25	245
6	高 良 山	〃 久留米市	2.5	250
7	女 山	〃 山門郡 瀬高町	3.0	200
8	帯 隈 山	佐賀県 佐賀市 久保泉	2.4	177
9	お つ ぼ 山	〃 武雄市 橘 町	1.8	66

図

版



(1) 杷木神籠石航空写真（白破線は外郭線）



(2) 杷木神籠石遠景（手前は筑後川）



(1) 杷木神籠石遠景（矢印：右は第Ⅰ水門，左は第Ⅱ水門）



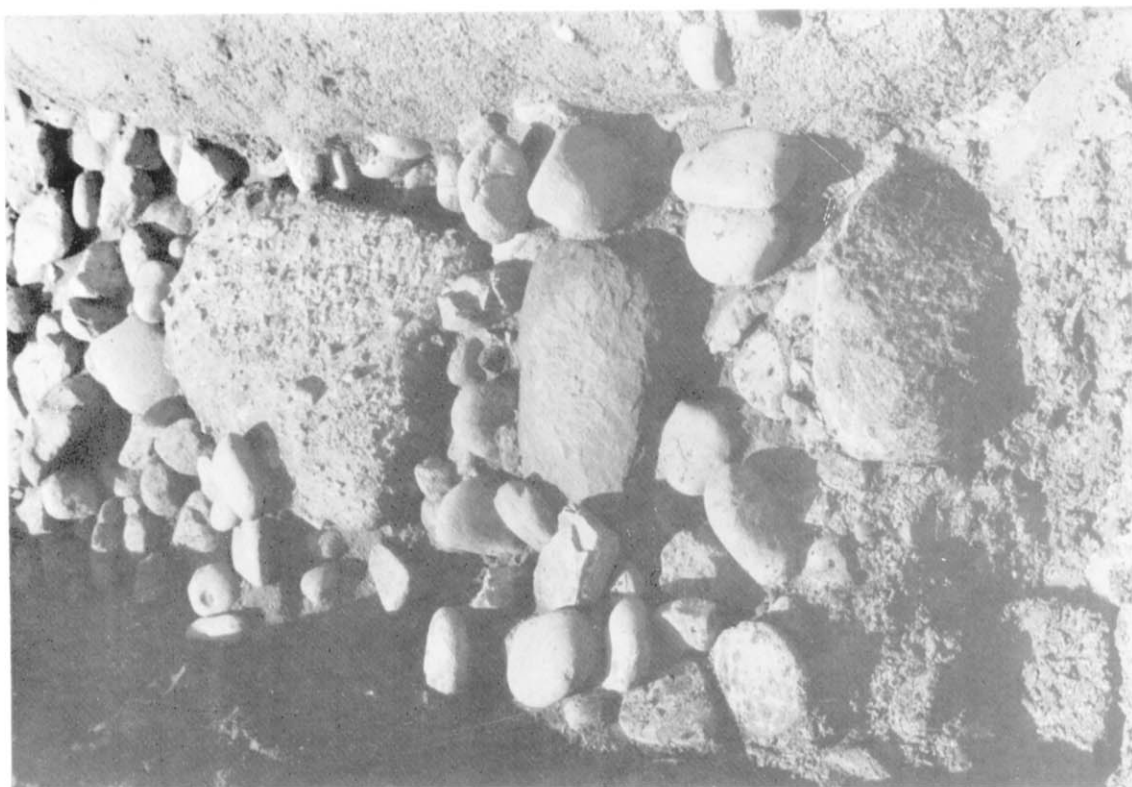
(2) 第Ⅰ水門とその谷



(1) 第 II 水 門



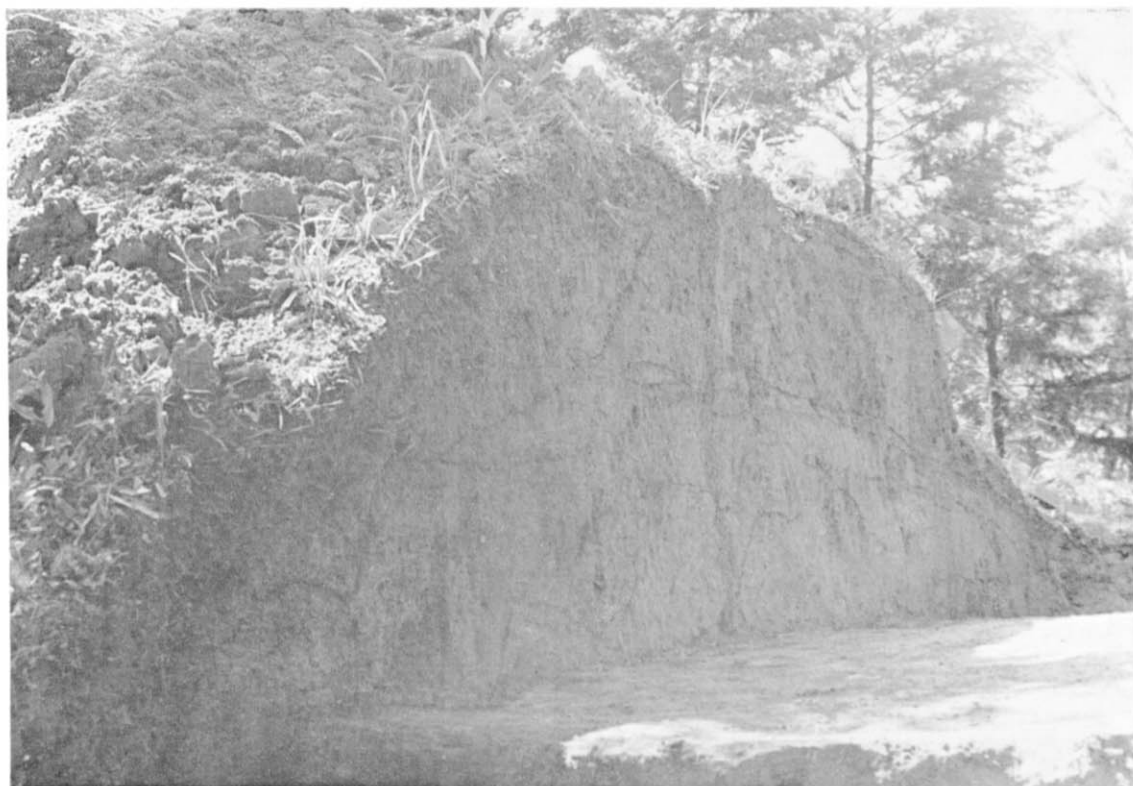
(2) 第 II 水 門



(1) 第Ⅱ水門（第8トレンチ栗石出土状態）



(2) 第Ⅱ水門（第8トレンチ栗石出土状態）



(1) 第 1 ト レ ン チ



(2) 第 2 ト レ ン チ



(1) 第 6 トレンチ列石



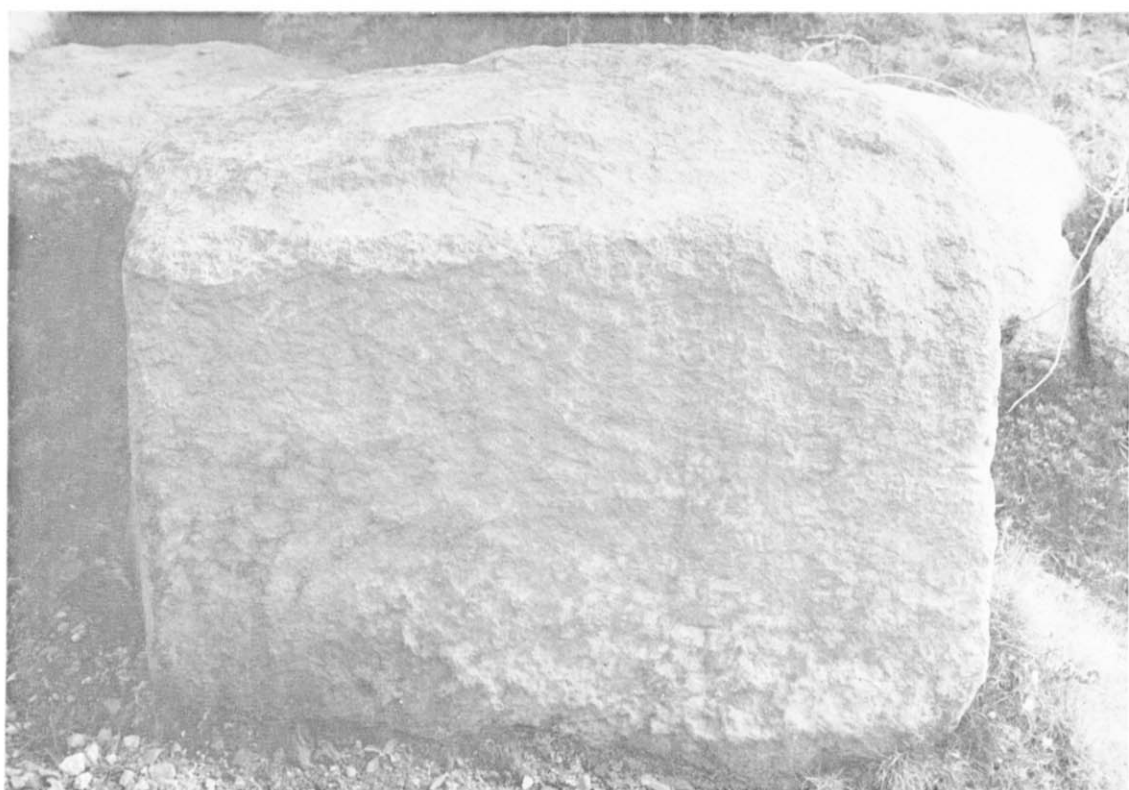
(2) 第 11 トレンチ列石



(1) 第11トレンチ北側斜面外郭線（矢印は列石線）



(2) 第11トレンチ北側斜面外郭線



(1) 外郭使用石材（山平氏造成地出土）



(2) 外郭使用石材（上の側面）

杷木町文化財調査報告書 第1集

昭和45年3月31日

発行 杷木町教育委員会

福岡県朝倉郡杷木町

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市清水1丁目16番地の1